

恐妻家という愛妻家

ブラジャーとパンティー一枚になった妻の後ろ姿。ベッドに入るため化粧を落としている鏡台の前の彼女。綺麗な背中だ。今年三十歳になったばかりの女盛りらしくなおやかな肩にむっちりとした肉がついている。背筋がすっと通り、すぼまっていくウエストの曲線につれてほんの少しカーブし、パンティに隠れるか隠れないかのところで腰骨へと消えていく。素肌の美しさはこの女の特徴でもある。雪白とでもいうのだろうか。興奮めのシミなどどこにもみあたらず、ほの白いしっとりとした輝きを湛えている。むろん、ホクロなら幾つか見られる。よく、ポルノ小説で『シミもホクロもない美しい女体』といった表現が頻繁に出てくるが、シミはともかくホクロのない人間などどこにもいないだろう。妻にももちろんあった。ちょうどっすらと浮き出た肩甲骨の下、ブラジャーの紐の少し上辺りに、ぽっちりとした黒い小さなホクロがある。あと、目立つのはうなじだろうか。無造作なストレートボブにした彼女のヘアスタイルの生え際のところにもひとつだ。そして夫の沢口康彦はもうひとつその在りかを知っている。ベージュのパンティに隠さ

れた、坐っているなので余計強調されるあの肉づきのいい臀部、いや、お尻の方ではなく、前。小判型の黒毛と女陰を中央に据えた▽と逞しい太腿とのつけ根の、いわゆる鼠蹊部にはもう少し大きめのホクロがある。彼女の鋭敏な性感帯をマーキングしているかのように、ホクロは微妙な部分にみられるのだが、まるで女盛りの風情を匂い立たせるような役割を果たしているようにも思えるのである。

サイドテーブルに置いてある灰皿にセブンスターをもみ消しながら、一足早く寝着に着替えベッドの中にいる康彦は最後の紫煙を吐き出した。

夫である康彦にとってもこんな妻の艶っぽい姿を見るのは久しぶりだ。とにかく忙しすぎるのである。康彦がではなく、妻が、である。

妻、岡崎晶は出版社の営業部課長なのだ。中間管理職はどこでもそうだが、とくに大手でもなく、かといって小さくもない、彼女の会社のような規模の出版社では営業部こそ昼夜を惜しんで働かなければならない。もともと雑誌の編集に憧れてこの業界に飛びこんだ彼女だがなぜか営業部に回され、しかしこれも総合職の務めと持ち前のファイトと知性で仕事をこなし、気がついたらこの地位にいて、もはや後戻りできなくなっている。かえって気の強い彼女の性格に合ったのかもしれない。今ではバリバリのキャリアウーマンである。そして夫婦のすれ

違いはもう日常化していた……。

鏡に映っている妻の貌、サイドを後に引いたボブのため、フェイスラインが強調されているが、化粧が落ちてなんとなく丸くなり、多少、焦点は散漫になっている。夜の女の貌とはいつもこういうものなのだろうが、知の勝った、気性の激しさを思わせる、彫りの深い晶の美貌はやはりいつもとどこか違う、疲れのたまった様をしていた。

彼女を疲労させているのは仕事過多だけではなく、ほかにも理由があるのだがそれは後にして、この夫婦の姓が違っている事実をまず説明せねばなるまい。晶はいわゆるフェミニストなのだ。翔んでる女である。彼女らに共通する主張のひとつがこの夫婦別姓だ。

『なぜ、女が男の姓を名乗らなければならないの？』

と、晶の黒目がちなキラキラとした瞳に見つめられると康彦はなんら反論などできなかった。といっても現段階では法律的环境は整っていないから、二人はやむをえず正式な籍に入っていない内縁関係になる。『事実婚』という体裁のいい言葉が今では用意されている。

もちろん家事は完全分担制だ。一週間おきに朝食と夕食を交互に担当する。洗濯も自分の物は自分で洗う取り決めであった。

すべては平等に分担された夫婦になっている。

康彦が晶の言うフェミニズムをまったく理解をしてこ

のような夫婦生活——康彦の会社の同僚に言わせると、貧乏クジをひいた地獄の生活——を送っているかという
とそれは疑問だが、彼にしても同居する以前、彼女と恋人同士であった頃から彼女のこんなイデオロギーを知っていたわけで、反論する資格はあまりない。つまり、泳ぎも満足にできないくせに自ら川に飛びこむ愚を彼に冒させるほど、彼女、岡崎晶の魅力はすばらしかったといえる。モデル並みの容姿とスタイル。冴えた知性、そしてどこか冷たそうにみえる外見とは裏腹にこれでなかなか優しくかったりするのがたまらない。溺れても悔いのない女だったのである。

すべてに平等を原則として出発した彼らだったが、ここ一二年、その不文律もおかしくなりはじめていた。それも言い出しっぺの晶の方が原因なのだから、世の中わからないものだ。つまり所得に圧倒的な差がつき始めたのである。若くして管理職についた晶、しかも残業、残業で、その手当ても雪ダルマ式に増えていく。今だに平社員で定時にさっさと帰ってくる康彦とでは差がついて当然だろう。さらに仕事人間と化した彼女となれば家事だっていつもこなすわけにはいなくなる。よって、ついつい康彦が主婦業に専住するようになってきたのである。

『いいよ、いいよ、おれ、やるからさ』
康彦はあくまで寛大なのだ。

『うん、御免ね。今やってる仕事が一段落したら、いっぺんに取り返すからさ』

晶は、それが彼女の癖なのだが、少女がよく使う少年風の口調で恐縮するのだけれど、その仕事が一段落してもまた次の仕事が余裕なく入りこんでくるので、ちっともご無沙汰の状況は解消されないのであった。

そこで晶はバランスを取るためにセックスを熱心に務めだしたものである。もともと男女同権主義者の彼女にとってセックスほど厄介なものはなかったのだ。なぜなら、いくら平等を叫んでみても、いざ夜の生活になるとどうしたって、女が男に主導権を握られ、隷従するていは免れない。掴まれ、揉まれ、ペニスで貫かれ、組み拉がれ、迸りを子宮に射こまれる。それはすべて、男性＝能動、女性＝受動、といった図式から一步も離れないではないか。平等を突き詰めればどうしたってそれには消極的にならざるをえない。少なくとも男性の要求をすべて満たすような回答はありえなかったわけだ。彼女にとってセックスとは生殖以外の役目はなく、せいぜい愛情をたしかめるディープキス程度で済ませてしまうのが妥当という結論だったのだ。

ところがこんな状況ではそうも言っていない。自分から言いだした規則を自分から破るなど、勝ち気な彼女には耐えられなかった。この上は閨床でのハッスルで折り合いをつけるしかあるまい。康彦がこれに喜ばぬは

ずがなかった。なんと、あの晶がフェラチオまでしてくれるのだからたまらない！ 野性的な美貌を真っ赤にして——昂奮すると彼女はやけに貌を紅潮させるのだった——自分の男根を啜え、荒い鼻息を吹きこぼしている晶の姿などまったく期待していなかったものだから、彼の有頂天もわかるうというものだ。

ところがそのセックスすら最近では疎遠になりつつあるのが沢口・岡崎家の現況である。どうも最近はや夜の接待が多く、帰りが深夜に及ぶのが頻繁になってきたのだ。もちろん晶がである。それに彼女が積極的になってきたのをいいことに康彦が何かと要求を多くしたのも原因かもしれない。アクロバチックな体位とか小道具を使おうとか、やはりアヌスにまで興味を示したのはまずかったか……。彼女の言い分では、やっぱり男ってやつは甘い顔をするとすぐ増長するんだわと、そうなるのだろう。御灸を据える意味もこめて、定番の拒否の言葉——『今日は疲れてますから』が晶の口から発せられる日々が繰り返されている。

こうしてどこかお人好しの夫は家事の分担だけが増えてセックスすら拒まれる踏んだり蹴ったりのハメに陥っているわけだ。

晶は化粧を落としおえ、立ち上がった。170近い長身は八頭身で抜群のプロポーション。額で軽く遊ばせている前髪が柳眉の上まで斜に流れすっぴんの生々しさを

若々しく相殺している。晶の活動的な性格を現すようにヘアスタイルは以前からショートカットだったのだが、上手なスタイナーに運よく出会ったらしく、『岡崎様はこちらの方がおよろしいでしょう』と勝手に変えられたのだそう。髪型などには無頓着な彼女。ロングヘアの好きな康彦にも『髪は女の命、なんて男の作った伝説よ』と一笑にふしていたくらいで、日頃の手入れが少なくすめばそれでいいのだが、豊富な髪を後にまとめてボリュームを持たせ、耳や額を大きく出したこのボブはまさに一石二鳥の効果だった。手入れだって必要最小限だろうし、彼女の美しさが眩しいくらいに際立っている。

両手を背中に回しブラジャーを外した。そしてパンティに取りかかる。寝着の下には何もつけないのが彼女の習慣なのだろう。

(ケッ、その下着、誰が洗ってやったと思っているんだ。パンツの前のところに黄色いシミなんか作っちゃって、モミ洗いしなきゃ落ちなかったんだからな。めいっばい色っぽくストリップしろよ、晶っ)

新しいセブンスターに火をつけつつ、けっこう昂奮しながら妻のパンティを洗った時を思い出す康彦である。あのシミはおしっこなのか、それともマン汁なのか、今だに考えあぐねている馬鹿な夫であった。

猥褻な夫の妄想など露知らず晶は無造作に丸い双臀からベージュのパンティを下ろしていく。屈みながら長い

脚を折り曲げるので、ほんの少し贅肉のついた下腹に幾つか皺ができています。双乳がたわわに垂れ下った。紡錘形のふくらみ。吊り鐘型で格好が良く、胸壁からも十分に遊離している。巨乳ではないが美乳とは言えるだろう。重量感には欠けるものの、男の手のひらによくなじみ、言ってみれば『男好きする実戦向き』のオッパイである。鉄火の気性に比べてここだけは男に従順な発育ぶりである。乳肌はあくまで白く蒼い静脈が網目状に透いているのがここからでもわかる。乳輪は巨きからず小さからず三十女になった今も桜の花弁のようなピンク色で、昂奮していない時でもやや固めの乳頭がツンと上向きに突き出していた。

（綺麗だけど……ようするに俺の鍛え方が足らんのだろうなあ。もう少し形が崩れるほど強烈に揉んでやらにゃ、そして先っぽも激しく擦り上げてやらにゃ……）

しかしそれを実行すれば別居すら持ち出しかねないほどの山の神である。積極的になった時だって、行為するのはもっぱら晶の方で、康彦が少しでも行きすぎた真似——それでもSMすら流行っている昨今では珍しくもないのだが——をしようものなら、あからさまな蔑視線が飛んでくる。

それに手も足も出ず従っている亭主だ。妄想はあくまで妄想の域を出やしない。

先程からチラチラと覗いているのが晶の腋の下の黒い

鬚り。腋窩に縦長に生え茂った無駄毛を彼女は処理しない。康彦が妻の身体に不満があるとすればこの腋毛だけだろうか。百年の恋が覚めるとまではいかななくても、シラけた気分になるのは否めない。どうも腋毛などは愛だの恋だのから『退役』し、男性の視線も気にしなくなった、胴とケツの区別がほとんどなくなってしまったようなオバサンという、女ではない動物だけが持っている代物のイメージが強いのである。何もまだ女盛りになったばかりの美しい晶が生やなくてもいいではないか。彼女の素肌が雪白で美しい分、その黒毛が余計目立ってしまうのである。それに彼女はちょっと毛深い体質なのだ。油断すると脇を締めているときでも毛先が覗いてしまう場合だってなくはないのではないかと、いらぬ心配までしてしまう。

『腋毛は処理した方がいいんじゃないの』

恐る恐る意見してみたが、

『あら、あなただって生やしているじゃない。なぜ女だけが——』

と、あっさり却下されてしまった。夏になればそのまま半袖やノースリーブを着て出ていってしまうからハラハラする。

『ほら、変態がさ。いるんだよ、そういうのに昂奮して発情する奴が』

などと諦め悪く言ってみても、それは変態が悪いので

あって、女が悪いのではない！ で終わりだ。

（ま、いいか。そこ以外は最高なんだし、あんまり完璧なのも良し悪しで……）

情けなく自らを慰める康彦だ。

しかし腋毛の黒さは性欲を減退させるのに、アソコのオケケの密茂はかえって発情を促すのだから男なんていい加減なものである。

晶の陰毛の生えっぷりはもちろん濃厚なのだった。

パンティを脱ぎ、パジャマのズボンに脚を通す晶。

（畜生、たまにはこの間の結婚記念日に送った黒のネグリジェでも着ろよなあ）

感謝はしたもののそれも押入に積まれて埃をかぶっている運命だった。

まったく扇情的でない無地のパジャマに片脚を入れて、ケンケンしながらバランスを取っている彼女。股間に茂るケバの如き陰毛が丸見え。楕円の凹の臍窩の下、うっすらと盛り上がっていく腹部に、左右の股関節を結んだラインからポヤポヤと白肌にへばりつく陰毛が疎に生えはじめ、やがて小高さとともに小判型に密度を増していく。鬱蒼とした感じではあるもののムサ苦しさを覚えないのは毛の一本一本が若い性質を保っているからだろう。艶はいいし、腰も強そうだし、縮れも理想的だし、そう太くもないはずである。

下腹部の目にしみるような白と黒のコントラストはや

や淫猥なメラニンの濃度を強めた局部へと続いていく。黒毛は媚肉を飾るように左右へわかれて量を少なくしていくが、どうしてもそこは白肌というわけにはいかないらしい。肌色を煮詰めたような色素の沈んだ色合が鼠蹊部から——さっきいったホクロはその部分にある——順々に中へいくほど濃くなって、ムンと垂れ落ちるような肥厚の肉唇までくるとかなりの黒さを見せていた。一直線の秘裂は膝が腹につくほど屈曲した脚のせいでちょっとひしゃげ、内部をかいま見せている。

その奥の襞襞の色合の美しさときたらこれはまず最高！ 康彦がなぜ駄目亭主に甘んじていても浮気に走らないか、また離婚を考えないか、納得できるのである。

こう言っても過言ではない。

『岡崎晶のコーマンは日本一だ！』

境目をつくる襞の縁こそ黒ずんでいるものの、その一枚一枚は甘いピンク色をしている。ルージュをつけていない素の唇のような色だといっている。重なりも密で、康彦の経験談を聞かなくとも吸引力の粘り強さは想像できる。この女を仕こめれば——つまりつまらない思想を捨てさせてセックスだけに没頭させれば——どんなところに出しても高給をとる娼婦として売れるだろう。

晶はようやくズボンを腰まで引き上げた。

貌にかかった髪をうるさそうに掻きあげると、ふと康彦の熱い視線に気づいたようである。濃い眉がちょっと

不服そうに動いた。

『いやらしいわね、なに見てるっ』と、言われる前に、康彦が機先を制した。

「晶、今日は早かったね。何週間ぶりだろう」

「ン？ ううん……」

大きな瞳が今度は少し困ったように伏せられる。鼻筋の通った美しい鼻だ。鼻頭から小鼻にかけての肉がちょっと厚い。もちろん不快になる一歩手前だがそれを救っているのは柿の種の形をした鼻の穴。性欲が高められた時はこの鼻孔をふっくらふくらませ、鼻の頭に玉の汗を浮かせるのが晶の体質である。いつかここにかじりつきたいと康彦は思っている。

「明日、大事な会議があるんだ。それでちょっと休んでおかないと……」

パジャマの上着に腕を通し、乳ぶさの前でボタンを止めていく。いやらしい腋の下も、小生意気な上向き乳頭も隠されてしまった。

「なーんだ。僕のためじゃなかったの」

嘘を言えない晶の性格を逆手にとって、康彦は苛めにかかる。駄目亭主のわずかな楽しみ……。

「それはさあ、だってさあ」

などと曖昧に笑いながら晶は康彦のベッドを跨ぐように飛び越えた。彼女は中学の頃、陸上部にいたのだそう。自分のベッドに坐り、照れ隠しに笑っている。やや

大きめの口は笑顔を作るには最適だが、自己主張する時にはまったく生意気に動く。もちろんxxxを啜えてもダイナミックだが。

「土曜日に五階だけの理事会があるんだけどね」

二人が住んでいるマンションでは運営会が盛んである。ご町内のつき合いも半々に分担されるはずだったが、これもお多分に漏れず、康彦の超過となっている。

「……土曜日はとても無理ね……」

晶はアアとベッドに仰臥した。どこか虚ろな目で天井を見つめている。やはりかなり疲れているんだろう。

しかし同情は禁物だ。仏心ばかりではまた何週間もお預けを食わされてしまう。こんな美味しそうな肉体を前にしてそれは拷問。パジャマの胸の盛り上がり……素肌や黒髪の芳しい香り……。

もうたまらない。

「そっちいっていい？」

ここで赦しを求めるところが康彦の青いところである。

「へ？」

と、晶は今にも飛びかかってきそうな夫の顔を見た。

「駄目だってば。疲れてるって言ってるじゃない」

こちらの痛いところを突きながら身体をねだる康彦のやり方に気づき、晶は思い切りふくれっ面になった。

「狡いのよねえ、男って本当に……」

侮蔑したように康彦から視線を外し、晶は掛け布団をはぐって身体を滑りこませ、夫に背を向けてしまう。

いつもならここで康彦は全面撤退になるのだが、今夜ばかりはネチっこかった。康彦は彼に似つかぬ敏捷さで晶の花柄の布団をはぐってさっと飛びこみ、自分の身体を妻の背中に密着させた。柔らかい丸みを帯びた女の背中……一気に康彦の股間は血流を熱くさせた。

「ちょっと、いやだって言ってるでしょうに！」

つい声を荒げる晶。やはりセックスなんかでバランスをとろうとした自分が悪かったのだ。あれですっかり夫をつけ上げらせてしまった。

「つれないこと言わないでさあ」

康彦は晶の肩を掴み、黒髪にキスしながら鼻をくすぐる匂いに目を細める。

「こんな美女を目の前にして何週間も指を咥えてろってたって、誰だって無理じゃないの」

露出している耳を舌先でなぞってやった。うぶ毛がまたたくまに唾液に塗れ、やや紅潮したようにも思える。

しかし晶は鳥肌が立つように頸をすくめ、イヤイヤと夫の唇を拒絶する。

「お前に触ってこんなに昂奮してるのに？」

康彦は腰を突き出し、棒状に硬化している自分のモノを彼女のお尻に擦りつける。薄いパジャマの生地を通して灼熱の感触が伝わっただろう。

「晶だって健康な身体なんだからここらで一回やっておかないと、貌が脂ぎってきたら化粧の乗りも悪くなるしさ」

「もう、いやらしいんだからまったく——だから明日、例の会議なんだから堪忍してよ。とてもそんな気分になれないよっ」

晶は康彦を押し返すようにして、ふと気が沈んだように視線を宙にさまよわせた。

「例のって……ああ、あいつの話か？」

康彦も思い出した。

「あのセクハラ部長。まだモタモタやってんのか？」

無言で頷く晶。口元を引き締め、いかにも忌ま忌ましそうな表情になる。

話題の主、セクハラ部長こと大関栄作は営業部の部長である。つまり、岡崎晶課長の直属の上司になる。五十代半ばの男盛りで、仕事も今脂が乗り切った有能な男だ。どこかの名門の出だそうで、才能より人脈、血脈、金脈を利した仕事ぶりでのしあがってきた。もっとも営業などといった仕事は結局そうしたファクターが圧倒的に成績に左右するのだから当然といえば当然である。会社側も彼を重宝して何かと便宜を計らったりしていた。

セクシャルハラスメントに走る男の要素としては、地位があり仕事ができ自信過剰な点が挙げられる。自分が会社になくってはならない存在であるのを知っているの

で、多少のわがままも通ると思いきこんでいる。無類の女好きであるのは言うまでもない。『英雄、色を好む』などと今の世に言えば総スカンを食うのは目に見えているが、大関栄作においてはそう言っただけからではないアクの強さがある。女など所詮性的対象の道具にすぎないと見下す意識が——これはどの男にも少なからずあるのだが、この大関にはとくに——根底にあって、社の一般職の女の子は毎年ひとりには必ず彼の被害にあっていた。

そして今年はどうとう晶の部下の女の子が餌食に。

大関のセクハラはお尻を触ったり、太腿を撫でたり、卑猥な言葉を言ったり、程度の軽微なものではなく——そういうケースも時にあったが——目をつけた女の子をデートに誘い、車で送り狼をする、手口としては単純だが成功率の高いものである。女の側もなぜ男の車にやすやすと乗ったのかという弱みがあるので、なかなか表沙汰にしにくい事情があり、立件するのは難しいのだ。

しかし、女の子が妊娠したとなれば話は別である。

今年、高校を出たばかりの、まだ十九歳、社の一般職の制服のよく似合う、いかにも中年男が好みそうな白むちぽっちゃりタイプの、島田綾が大関の餌食になって岡崎課長のもとに飛びこんできたのはもう一カ月も前になる。

常々、大関の好色な噂に齒軋りしていたフェミニストはここに至ってとうとう立ち上がる決意をした。当然、

大関は知らぬ存ぜぬでシラを切る。それではと掛け合った会社の上層部の態度の曖昧さは晶の腹を立てさせた。

『だって妊娠させたんですよ！』

晶は常務の前のデスクを叩いて吠えたてた。

『まあまあ岡崎君、そう昂奮しないで』

結局彼らは大関の持つコネクションを失いたくないのが本音なのである。辣腕部長と入社したばかりのお茶酌み社員とを天秤にかければ、会社としてどちらを取るかは明々白々。正義や法律などは二次的問題にすぎない。ノラリクラリと時間を引き伸ばし、綾の軟化を待つ作戦なのである。そういったビジネスライクな意識とは別に、言下にチラホラ見え隠れする、こういう問題は女が身を引くのが当然だとする男社会の本音も晶をイラつかせた。さらに大関がその金脈を使って手を回したらしい節もある。業を煮やした晶は、ここまできたらマスコミに訴え、裁判沙汰も辞さない覚悟だと宣言した。これには当の綾も消極的だったのだが、晶がその尻を叩き、駆け引きも必要と説得したのである。出版社の業種柄、案の上これは効いたようだ。慌てた彼らは大関と綾双方を同席させた交渉の場をもとうと約束してきたのである。

それが明日に迫っていた。

「どう？ 成算は」

康彦は晶の耳たぶや首筋にキスしながら尋ねた。

「五分五分ってとこね……いやっ」

「あんまり昂奮するなよな。君がクビになったら元も子もない」

片手で尻を撫で回す。いいケツだ。オッパイは巨乳ではないが、ここは発育した大年増のそれである。女の身体にも熟れていく順番があるのだろうか。

「ヒヒヒ」と康彦はいやらしく笑い、小声で囁きかける。「晶のここやオッパイも被害にあってるの？」

「え？ あっ、痛っ……」

パジャマの上から尻肉を抓り、晶がひるんだ隙に、上着のボタンをひとつふたつと外してしまう。桃色の胸もとが男の欲情をそそらずにはおかない。すかさず手を差し入れ、乳ぶさを掴み取った。何週間ぶりかの晶のオッパイ。

(いいなあ、やっぱり)

手ごろな大きさの肉ふさが手のひらの中で柔らかく丸みを変えていく。肌触りがつきたての餅のようだ。硬い先っぽの豆がコチコチと皮膚を刺激してくる。

「やめてっ、やめてってたら！」

美人妻はついに激怒して夫の脇腹に肘鉄を食わした。

「ゲッ——」

悲鳴をあげた康彦はもんどりうってベッドから転げ落ちた。

「……なによ、あなたっ、妻が疲労困憊になって取り組んでるっていうのに、そんなことしか考えられない

の！」

真っ赤になった晶の貌が上から覗いたかと思うとすぐに枕が飛んできた。

「男ってこれしか頭がないんだから！ あなたもあの助平部長とおんなじよ！」

いくらなんでも晶がこんなに怒りをあらわにしたのは初めてだ。相当、大関栄作には頭にきている証拠でもあるう。

(やっぱりこいつ、触られたんだな)

最愛の妻が夫にしか赦してはいけないはずの胸や腰を、札つきの変態に痴漢行為をかまされている姿……この気の強い女がたまらなかつただろう。だからこそこんなにも上司の追及に血道を上げるのかも。しかし不思議と、大関に対する怒りより嗜虐感の方が先にこみ上げくるのはどういうわけか。

(おれってサディストなのかな)

康彦がベッドとベッドの合間に挟まって脇腹の痛みに耐えながら苦笑していると、今度は康彦の枕が飛んできた。

「当分、おセックスはご辞退申し上げますっ、お休みなさいませ！」

皮肉っぽい口調とは裏腹に、岡崎晶は涙を啜り上げているようだった。

セクハラ上司

大関栄作はファイト満々でその日をむかえていた。

苦境に陥れば陥るほど彼のやる気は起こるのである。この劣勢をどう挽回するか、まるでゲームを楽しむように現実を見据えていた。学生の頃、関東大学ラグビー対抗戦グループに所属していて、明治や早稲田の連中も一目置いていた巨漢ロックの栄光をそのままに、五十の今まで保持しつづけている屈強の体格をいからせて、大関は鼻息も荒く会社に乗りにこんできた。

(おれの行く手を遮るものは何人たりとも赦さんぞ。
臍物えぐりだして三枚におろしてやる)

むろん現状打開のメドは立っていた。名家の生まれだがただのおぼっちゃんではなく、体育会系の出身だが頭脳の切れ味もピカ一だ。いわばコンピュータつきのブルドーザーである。唯一の欠点が女癖だが今来の窮地もその欠点によってもたらされたのであるが、細工は隆々である。牝狐たちの画策などすでに粉碎したも同然だ。

——彼の乗ったエレベーターが決戦場のあるフロアに到着したようである。

第三会議室の扉を開けると、今日の役者たちはとうに席についていた。部屋の奥、大きな窓の前には斉藤常務。その隣に彼の腰巾着といわれる広田人事部長。彼ら

が行事役とすれば、大関の対戦相手は彼の坐る正面に陣取っている牝二匹だ。右にこの会社一のマドンナ、岡崎晶。腕を紺のジャケットの胸に組んで——そうしているのでジャケットの下に着ているアイボリーホワイトのブラウスのバスト部分がムンと盛り上がり——踏ん反り返っていやがる。大関に一瞥をくれると唇を心持ち尖らせるお出迎え。

（なんて態度だ。誰がここまで育ててやったと思ってるんだ）

しかしその唇の悩ましさにも心を奪われる大関である。薄いルージュを引いた唇。下唇はぽってりと量感があり、縦皺まで瑞々しい。上唇はきちんと山形が浮き出ている成熟した大人の女の雰囲気ムンムンである。男だったら一度はこんな上物の唇と口吻を情交したいものだ。このやや大きめの口がいったん火蓋を切ればまるで学生運動の闘士のように舌鋒鋭く告発してくるのだからなおさら忌ま忌ましいではないか。

（今日もスラックスかい、マドンナさんよ）

この女のスカート姿など拝んだ記憶がない。脚に自信がないわけじゃあるまいし——いや、きっと極上の下半身に違いないのだ——少しは男性社員の日を楽しませるのが総合職の女の務めってもんだろうが。貌もいつも通り薄化粧。ちょっと瞼が腫れぼったいか……。肌の艶も心持ち冴えない感じ。しかし美女とは得なものでそんな

遜色も『やつれ』ではなく『翳り』として男は受け取るから女っぷりを下げるものではないのだった。

とはいえ——

（畜生、昨晚も旦那としつこく乳繰りやがったんだな。こっちが人生最大の危機と右往左往してる時に。この売女が！）

ますます腸煮え繰り返るセクハラ営業部部長だがそれでも感情を押し殺し、

「お早よう」

と、晶と正面に向いあう席に坐った。何かと愛憎の感情が複雑に錯綜する晶に比べ、彼女の隣で小さくなっている島田綾ちゃんの初々しさはまず大関も目を細めるばかりである。大関が会議室に入ってきたとするや、頬を真っ赤にして動揺を隠しきれなかった彼女。それもそのはずまだ二十歳前なのだ。大関の娘といってもいい綾はブルーと白の清潔な制服がよく似合う。ブラウスの胸もとを飾る赤のボウタイがなんとも愛らしい。

（やっぱり女は制服だよなあ。スカートもミニだし）

パンストに包まれた健康的そのものの二肢が小刻みに震えている。

頭髮もポンパドールでお姫さま風にまとめあげ、しもぶくれの貌の輪郭にマッチしている。

（横で凶々しくのさばっているオバンとは違うよなあ、綾ちゃん——）

しかしこんな純情可憐な島田綾がバージンではなかったのは意外だった。てっきりそうだと狙いをつけていたのだが、見事に化かされてしまった。やはりこやつも狐だったわけか。

(最近の若い娘はまったく……。どうなっているのかね)

しかしその狭隘さは期待にたがわないものだった。経験はほとんどなかったに違いない。挿入した時のあの泣きようは、おぞましさに泣くのではなく、まして随喜に獻くのもなく、まだこじ開けられる痛さに苦悶するといった感じだった。それに加えて、あの身体！ 豊満なのだ。どこもかしこも豊満なのだ。いろいろ揺さ振って聞き出したところによるとバストはじつに96センチ。ヒップも95センチとまったくアダルトビデオギャルそのものである。そしてそれがちっとも垂れていず、若々しく弾力に満ちている。これほどまでとは思っていなかったのだが、会社にくる時はブラジャーでギュウギュウ締めつけているのだそうだ。男に愛撫されるために生まれてきたような女である。

島田綾。可愛らしい、食べてしまいたいような娘。

この娘なら妊娠したとダダをこねられても赦せる気分である。大きな海のような気分で墮胎専門医を紹介できる。しかしそれはあくまで大関自身に打ち明けてきた時の話。よりによって岡崎晶に訴えてしまうとは。

(だけど、いいよ、赦してあげるよ、綾ちゃん。まだ子供なんだから。我を失うのは当然さ。それをここまでこじらせたのは、すべてこのスベタ課長のせいなんだから)

自分の責任をまったくどこかへ忘れてしまって、他人へ転嫁させるのがセクハラ男の常道だ。大関もまた晶への恨みで一杯になっている。彼女が美しい分、自分がコケにされている度合いも強い気がしてくる。

「さて、そろそろ始めようかね」

常務の齊藤が広田に言った。広田が一応、議事進行を務める役になっている。

大関のここ二三日の必死の巻返しにより、二人はどうやら部長擁護派に傾いたのだった。

(苦勞したぜ。人の足元見やがって、こいつら。ふっかけやがるから)

しかしそれも致し方あるまい。これが公になれば前途洋洋たる大関の人生もパァなのだから。いずれ大手の出版社に鞍替えしようと考えている彼にすれば安い出費かもしれない。あとはなんとかこの年増狐を丸めこんで口を封じてしまえばいい。

「それではまず事実の確認からやっていくから。いいですね」と、広田。

「人事部長——」

さっそく晶だ。彼女はハンカチを目頭にあてている島

田綾の肩を抱くようにして、大関にがんを飛ばしながら鼻を蠢かせるように広田に意見を言う。

「それはあまりにも島田さんへの負担が大きすぎますわ。当事者の男性との同席自体、女性にとって勇気と決断の伴うものです。それをまた根掘り葉掘り尋ねていくなんて。人権侵害もほどがありますわ。事実認定ならこれまで飽きるほどやったじゃありませんか」

晶はやや肉の厚い鼻の頭に玉の汗を浮かせながら毅然とした態度で一步も引かない構えである。

(あの小生意気な鼻に鉤枷をつけてブタにしてやったらどんなにか胸のすく思いだろう)

大関の思考はあくまで好色の欲望に根づいている。

「しかしね、岡崎君」

大関が初めて口を開いた。綾は嗚咽を高くした。

「何も心が痛むのは島田君ばかりじゃないんだよ。僕だってあの日の一件をほじくられるのは辛いのだし」

これは呆れたとばかり晶は冷笑する。あなたがそれほどヤワな神経の持ち主のはずがないじゃないか、と目がそういつている。

「それを押して常務たちにだね、真実を知って戴き……」

晶が手を上げて大関の言葉を遮った。

「当事者が二人とも揃って心が痛むといつているのを、わざわざ蒸し返さなくともいいわけですよね？」

最後は斉藤常務に向って念を押す。

「ン？ ま、まあそうなんだが……」

斉藤は助けを求めるように広田に視線を移した。紳士だがどこか押し出しが弱く『お公卿様』と影口されている常務は白頭に手をやって狼狽しきり。広田も窮しているようである。黒縁眼鏡の奥の目が、余計なことを、と大関を責めているようだ。

「それでも尚且つ事実の公表をとおっしゃるのなら、こちらは弁護士と同席を要求します」

ピシャリと言い放ち、晶はテーブルに出されていたお茶を手にとった。晶の、大関の一瞬の隙をとらえた見事な反撃にまずはマドンナ側の有効一本である。何しろ彼女たちのバックには腕利きの弁護士がついているらしい。そんなものに出てこられてはせっかくの根回しも何もなくなってしまふ。

(糞、どこまで赤恥搔かせれば気が済むんだ、白豚めっ、いつかかならず吠え面搔かせてやるぞ)

大関は無表情を装うのに苦勞する。

「それでは、と」

広田は体勢を立てなおすべく、ゆっくりと間を置いた。煙草に火をつけたりする。

「いずれにせよ、大関部長と島田君の間にはそういう関係があったわけだ。それは二人も認めている。そうだね」

「そうです。私も男のはしくれ、それは認めます。しかしもちろん両者同意の上の、いわゆる和姦ですよ」

「もちろん、部長という地位を利用したうえに、男の暴力を使った、いわゆる強姦です」晶も負けてはいない。「いいですか。これはセクハラの域を越えた、れっきとした犯罪行為に類する問題なのです。それなのに訴えもせず、警察の介入さえなかったのは、ひとえに島田さんの大きな心によるものなのですよっ」

「君だったらとっくに訴えていただろうにねえ」

語気を荒げる晶に広田がショートジャブ。

「岡崎君だったら私の方が訴えていますよ」

と、大関も混ぜっ返したので三人の男は低い声で笑いあう。

ムツとふくれっ面になり、今にも爆発しそうになる晶だったが綾の嗚咽が冷静さを取り戻させてくれる。

「——これは私ではなく、島田さんの問題なのです」

「そうそう、島田君の問題。岡崎君は当事者ではないのだ」

やっととっかかりを得たというように広田は狡猾にそこを突いてきた。

「なのにだ。先程から岡崎君の声ばかりが目立って島田君がちっとも発言しないのはいかななものか。そりゃ発言しにくいのはわかるけれど、君だってもう社会人なんだし、こうして事をおおっ広げにしたのは君自身なん

だよ。ひょっとするとこれは大関部長の一生の問題にも発展しかねないものなんだから、しっかりしてくれなきゃ。人ひとりの人生を左右しかねないって点を、もっと自覚してくれなきゃ困るよ」

まるで綾が悪いような言い草である。レイプの被害者は二度、犯される、を地でいっている。

「人事部長、そんな言い方って——」

憤然とする晶を今度は齊藤常務が遮った。

「まあ、岡崎君、島田君の意見を聞くのはやむをえないのじゃないかね」

これには反対する理由はないのだ。晶は唇を噛みしめながらも一歩引き、いとおしそうに綾に視線を移す。

(ヒヒヒ、ようやく男性軍も劣勢を挽回しつつあるじゃないか。そういう風に役割分担をはっきりさせて揺さ振らなきゃいかん。三位一体攻撃しかないんだ。この岡崎城攻略は)

大関の心にもゆとりが出始める。もちろん表情にはまったく出さないが。

綾は嗚咽をしゃくり上げながらもその日の顛末を話し始める。会社のコンパでカラオケバーで飲んでいると、大関部長がしつこく言い寄ってきた、妙にカクテルを勧められた、未成年者なのでと断ると、さっきまでビールを飲んでいたらじゃないかと笑われ、飲まずにはおれなかった、口あたりの良さに騙されて何杯もおかわりしてし

まった、急に酔いが脚にきてひとりでは歩けなくなった……

（そこからは定かな記憶はないのである）

……部長に支えられてどこかを歩いていた……豪華な外車の助手席にいた……髪を撫でられた……ホテルに行こうといわれた……それからどうなったのか……気がついたら大きなシャンデリアのある部屋にいて……ベッドに寝かされていて……それから……それから……。

「もうよろしいでしょうっ」

美人課長が叫んだ。

「私の書いた申告書どおりだと、お認めになりますね」

泣き伏してしまった綾の震える肩を優しく抱いて晶は男たちをキッと見回すのである。今や彼ら全員が敵であるのがはっきりとしていた。大関の鼻薬が功を奏したのだろう。彼ら全員がこのセクハラ事件を闇に葬ろうとしている。自分以外にこのか弱い小羊のような娘を助けられる者はいないのである。

「申告書どおりだね」

広田がわざとらしく眼鏡に指をかけ位置を正しながら、デスクのレポート用紙をめくっている。

「そう、申告書どおりだ。肝腎のところになると記憶が曖昧になるところが」

「なんですって！」

色をなす晶。立ち上がっている前髪がさらりと額を撫でる。後にまとめていた頭髪から一本のほつれ毛が火照った頬に貼りついていていた。

(こいつ、結構、汗掻きなんだな)

大関の股間が疼いている。

(膝の上のにのっけてズッコンバッコンやってやれば、おっぱいの中からボタボタ玉の汗を落とすに違いないぜ)

そんな岡崎晶の姿を想像しながら——なかなかしにくいのだが、そこを無理に想像して——大関はますます股間を昂奮させる。彼の場合、ここの発熱がすべてのエネルギーの源である。

「だってそうじゃないかね」

人事部長の声は落ち着いている。最初の失点からは完全に立ち直っていた。

「このレポートによれば、大関部長の車に乗ったのは、まったくアルコールによる理性の弛緩、になっている」

「そうですね。それでなければどうして——と、大関を軽蔑したように見——、幼稚な手口ですわ。今時、こんなやり方、東京でやるかたがおられるなんて、驚きですよ」

「つまり、だ。そんな子供騙しの手口に引っ掛かるなんていうのは、そして上司ではあれ、酒席の帰りに男の

車に乗る際のある行動を取ってしまったのは、酔っ払っていたからだ、と言いたいわけなんだ？ ね？」

「そうです」

「君に聴いてるんじゃないっ。島田綾君に聴いているんだよ！」

広田はやや声を荒げて机を叩いた。むろん晶に対するより、花も恥じらう十九歳の乙女への恫喝の意味もこめているのだろう。それにつられるように、綾はビクッと肩をすくめてガクガクと頷いた。

(へえ、広田のやつ、こんな芸風も持ってたのか。少しは見直してやらんといかん。ま、女子供をチビらせるしか能がないといえはそれまでだが)

大関は綺麗な二重瞼を涙で腫らしている綾ちゃんにいたく憐愍の情を向けながらも、またその落花の風情でズボンのファスナー付近を盛り上げている。岡崎課長に知られたら不謹慎さを激しくなじられて一気に敗北の坂を転がり落ちるだろう。まあ、こんな時に机の下を突然覗きこむ人間はいないので、思い切りふくらませるわけだが。

「じゃあ聴くがね、そこまで酔っ払っていてどうして和姦か強姦かって、区別できるのかね」

「それは、だって……」

晶も虚を突かれたように言葉が続かない。

「酒をたしなむものならわかるだろうけど、へべれけ

に酔っていた者がたかだか一時間か二時間で、正気を取り戻すのは通常考えにくいとするのが自然だろう」

「いや、人事部長——」と大関が駄目押しだ。「あの時はどう甘く見ても一時間以内でしたよ。バーからホテルまでは。深夜でしたからね」

どうだと言わんばかりに晶を見返す大関。今や有効ポイントを凌ぐわざありを取った男たちは晶を完全に押さえこみ、あとは一本のコールがされるまで時の過ぎるのを待てばいい。

大関は厚い胸板を誇示するように一杯に胸を張ってやる。どうだ、この胸でお前も抱いてやろうか、とそう嗤っているようだ。男らしさを前面に押し立てて女どもを蹴散らしてやるぞと一種の示威行動である。

(こいつ、大女のわりに胸が小さいよな。いや待てよ。綾のように、フルカップのブラで潰れるほど締めつけているのかも。いやいや待て待て。こういうフェミニストに限って馬鹿な真似はせんたる。まあ、いいさ。綾のようなボインちゃんもいいが、ペチャパイならペチャパイの楽しみ方だってあるってもんだ。女ってのはそういうもんだぜ)

大関は岡崎晶を自分の女にしたようにはしゃいだ気分になっている。やはりおぼっちゃん育ちの性質は抜け切らないものなのか。国民性で言えば南欧人のそれか。

「ちょっと待ってください」

それまで俯き加減で必死に思考を巡らせていた様子
の晶がさっと貌をあげた。美貌がなんとも明るく輝いて
いる。男たちからみれば不吉きわまりない美しさ――。

「それではなぜ」と、晶は言った。「彼女は妊娠して
しまったのでしょうか」

一瞬、大関の表情が強ばるのをたしかめながら、晶は
自分で自分をたしなめる。

（そうよ。今日はこれが一番大きな問題だったんじゃ
ないの。私としたことが何をやってるのよ。やっぱりど
こか緊張してたんだわ。あのタコ旦那のおかげで寝不足
だし）

心の中でペロツと舌を出して晶は続けた。

「もし和姦ならば、彼女、そしてとりわけ彼こそが避
妊の方法を取るはずですよ。それがこれまでの彼の、女
性に証拠を握られないための、後腐れを残さないため
の、最低限のエチケットであったのですから。そういう
余裕のない強姦行為であったからこそ、裸の欲情を彼女
の体内にぶちまけるに及んだのでしょう。彼女は無意識
においてもなお、自らの操を守るべく激しい抵抗をした
のだと思います」

もし、疑いがあるならば、これまでの彼の行為の詳細
を彼に関係した女性たちに証言してもらう旨、承諾をと
ってもいる、とまで晶は鼻の頭に汗を光らせながら言っ
た。細頸からわずかに開いた胸もとにかけてもうっすら

汗ばんでいる。

——「どうも蒸すじゃないか、今日は。にわか弁護士さんも汗だくの熱弁だよ」

齊藤常務ののんびりとした声が緊張した雰囲気、に煙幕をかける。広田が立ち上がってエアコンを覗きこんだ。押さえこみをすんでのところで逃れた晶は、形勢を中央に押し返して仕切り直しである。男たちは手練手管で時間を引き伸ばし攻めの糸口を見つけだそうと、内心、躍起である。

「坐ってください。続けてもらいましょう」

それを楽々看破し、議事進行を要求する晶。

(忌ま忌ましい女だよ、まったく。もしこいつを自由に出来るとしたら、まずは逆海老縛りにしてそのまま天井から吊して懲らしめてやる。大女のお前にはさぞや辛い責めになるだろうよ。オッパイの先っぽに分銅を吊り下げて、充血したそこに針を刺してやるぞ。チクショウ、まったく小憎らしい女だ！)

大関はあらぬ妄想に昂奮しながら憎悪を募らせていく。

エアコンのスイッチを切ったり入れたりしていた広田は、そのまま自分の席には戻らず、ぐるっと会議テーブルを一周して島田綾の傍らに立つのだ。

「ところで君、バージンだったの？　ン？　違ったんでしょう？」

唐突にドぎつい質問をして攪乱する奇襲作戦に出た。

「ちょっと、それどういうことですか。関係ないでしょうが。プライバシーの侵害ですよっ」

晶も思わず立ち上がる。スラッとした長身。スラックスがぴったり貼りついたケツは位置が高いくせにムクムクと巨きな肉づきだ。その正面に坐る常務が目を白黒させている。

「だからさ。課長に聴いてるわけじゃないんだから。そりゃ岡崎君が処女じゃないくらい誰だってわかるけど、彼女はわからんでしょう。やっぱり聴かないわけにいかんでしょう。こっちの役目として」

広田は晶に一瞥もくれずに綾に質問を浴びせていく。どうせこんな話は大関から根掘り葉掘り聴取済みなのだ。晶ではなく綾を攻めて膠着状態を打開しようとする狙いである。

「これは大事な点なんだよ。聴くこっちだって苦しいんだけどね。処女の場合、妊娠しにくいというデータもある。きちんとしておかなわけには、ね、わかるだろう？」

片手を綾の肩に置き、もう一方の手をテーブルについて俯いている彼女の横顔を覗きこむ。刑事の取り調べのスタイルである。綾はひとしきり喘ぎ泣いた後、小さな声で言った。

「……初めてじゃありません……」

「二度目か、三度目か、それとも数えきれないのか」
たたみかける広田。

「そんなあ、二度目です」

「常務っ、もう聴いてられませんわ。やめさせてくださいっ」

くるっと振り返って齊藤に訴える晶である。この三十女のデカイ尻に見惚れていた齊藤は慌てて裏返った声を発するのであった。

「広田君、嫁入り前のお嬢さんだ。もっと聞き方に留意したまえ」

広田はしぶしぶ綾の傍らから離れた。芳香の如き黒髪の匂いを胸一杯に吸いこみ、十九歳の娘の涙に濡れた赫ら貌をとっくりと網膜に焼きつけて。

(最近の十九歳が本当にこんなに純情なのかね)

広田は自分の椅子に腰掛けながら小首を傾げるのである。

「それでは仕方がない。妊娠診断書を見せてもらいますか」

広田としてはしぶしぶの要求である。医学の進歩は日進月歩どころか、秒進分歩とっていい。妊娠超初期の段階でもう胎児の父親の血液型がわかるのだ。それもA B O型どころではなく、もっと深い精密なところまでわかってしまう。それを大関の血液と照合して一致してしまえば——一致するに決まっているが——もう言い逃れ

は出来なくなるわけだ。だから今までそれには触れないようにしていたわけであるが、事ここに及んでは止むを得ない。もっとも大関の血液型は親交のある医者によって捏造されているのでこの場は凌げるだろうが、第三者に再検査を要求されたらどうなるか。晶の今までの剣幕からして、とても逃れられるムードではなさそうであるのだが。

「ええ、今朝、島田さんが取ってきてくれましたわ」

晶はこれで形勢は一気にこちらに傾くと、してやったりの表情である。

しかしこの時、なぜか——ああ、なぜか島田綾の嗚咽が一層高まったのである。まだ周囲は気づいていなかった。せいぜい妊娠の言葉に感情が高ぶったハイティーンの悲嘆なのだろうと、そう思っているにすぎない。

「いいのよ、島田さん。泣いて当然よ。こんなにひどい真似されたんですもの。だからこそ勇気を出して闘わなければならない、そうでしょう？ あなたのその診断書で奴らをギャフンといわせられるんだから、さあ、頑張って」

晶が優しく頼もしい声をかければかけるほど、綾の泣き声は大きくなっていく。そしてそうするうちに、とうとう号泣といってもいいほどの激しさをみせるに及び、晶を含めた他の四人は訝しげな思いにとらわれるのである。

「ご、ごめんなさーいっ」

デスクにピンク色になっている鼻頭を押しつけるように突っ伏すと、綾は胸のつかえを吐き出すように泣き叫んだ。

「ど、どういうことだっ」

大関と広田は同時に腰を浮かした。齊藤常務も口をあぐりと開けている。

「もしや——」

異口同音に叫んで、顔を見合わす二人。

「妊娠は嘘だった!？」

「ごめんなさーい!」

もはや子供というより赤ん坊のように泣き喚く綾ちゃん。

岡崎課長の驚きが男性軍の比でないのは言うまでもない。

「本当なの、島田さんっ。本当なのっ。妊娠は嘘だったの!」

肩を揺さ振り、力任せに起こそうとする。その貌は蒼白だ。起き上がった綾の貌は涙と洩でぐしょぐしょに濡れている。

「先輩があんまり意気こんでいるから、つい言い出せなくなって……」

晶は呆然とこの小娘をみやってしまう。

ようするに行き違いの一番の原因はセックスに対する

感じ方の『濃淡』だろうか。たしかにこの嘘つき雀によれば、大関部長に強引に——大きく首を横に振るセクハラ男——身体を奪われたのはその通りだ。だがそれはレイプなどといった深刻な感情でもって受けとめるものではなかったわけである。単なる火遊びのちょっとしたルール違反であることに彼女にとってはなるらしい。しかしルール違反はルール違反。管理職としての地位をかさにきてほっかむりされたのでは、まず癩に触るではないか。なんとか御灸を据える手立てはないものか。そこで目についたのは我らがマドンナ、岡崎晶であった。晶なら日頃、女性の自立などと吠えたてているし、事あるごとに大関の悪口をいって、つき合いは慎重にとっているし——どうなってんだこの野郎、と立ち上がる大関——彼女にチクれば一矢報いる気がしたのである。

ところが事態はそんな桃尻娘の浅はかな目論みとは裏腹に急転していくわけだ。

「だって岡崎課長って、暗いんだも一ん！」

「そうだ、暗い暗い」

と、同調する男ども。その顔は満面笑み。

身体を奪われ、妊娠したと泣くサンタフェ娘の一言で、晶は逆上した。キーンツとヒステリーを起こしたという。

「起こしてないわよ、ヒステリーなんか！」

無然とする晶。

「目に見えるようすな」

「いや、まったく」

男は全員、綾ちゃん応援団に鞍替えしている。

とにかく綾としては大関が冷や汗を掻く程度で溜飲が下がるはずだったのだが、やれ『綾ちゃんの涙を無駄にはすまさない！』だの、やれ『左遷じゃ駄目。懲戒免職を勝ち取るまで闘うのよ』などと鼻息荒い意気ごみにすっかり圧倒されて、真意を伝える機会を逃し続けていたのだ。そこへ持ってきて、『セクハラ救済センター』につめてある弁護士を紹介され、裁判に持ちこめばかなりの確率で勝利できる、と励まされ、あげく週刊誌の編集部等にも友人がいるから掛け合ってみると、事はどんどん大事になっていくので、まったく恐くなってしまったのである。

「それで今日まで、本当のことを言い出せなくなつて……アーン、ごめんなさーい！」

再び泣き崩れる島田綾。しかし今となっては誰も同情の視線を向けやしない。最初から殊勝にもしくしくと泣いていたのはレイプ被害者の痛みなどではまったくなく、自分の嘘がバレるのを恐れていたからと、まるで子供のような心情だったのである。

「いいよいいよ、島田君」

すかさず広田が敵軍の戦線分断に出る。

「君が悪いんじゃないんだから。それが普通の女の子

だよねえ、今の時代は——」

思わせぶりに上目遣いで晶をみる広田。

「しかしですね。大関部長が彼女にハラスメントを仕掛けたのは紛れもない事実でして、責任は免れないわけで——」

晶は必死の巻返しを図るものの、鼻白んだムードは覆しようにないようだ。

「いよいよ濃厚になってきたんじゃないかな」

広田がトドメを刺しにかかる。

「何がです？」

晶は厳しい目つきで人事部長を睨み返した。

(いいなあ、美人の追い詰められた風情って。口元がキリリと引き締まって、眦が吊り上がり、眉間に縦皺が刻まれる。劣勢に屈するものかという気概といかにも苦しげな心境とが混ぜこぜになった瞳の微妙な色合い。そう、きついSMの責めに苦悶しているマゾの貌と似ているけど、まったく極に位置する表情だもんなあ)

大関はあくまで、らしい感想を心に浮かべ晶の美貌を眺めている。股間の一物はもう破裂寸前だ。

「何がですか、広田さん？」

晶は聞き返した。

「噂ですけどね。岡崎課長が針の穴ほどの小さな問題を、海ほどに大きく膨らませて騒ぎたて、上司である大関部長の追い落としを図っていると。私も半信半疑だっ

たが、事実がこう展開していくと、あながち根も葉もない噂とも言えないんじゃないかな」

「な、なんですって！ 私がいつ私利私欲のために！」

「岡崎課長っ、ヒステリーを起こさないでください！」

「どこがどうヒステリーなのか、言ってみなさいよ！」

怒鳴りあう二人。島田綾の泣き声がまた高くなる。騒然とする会議室。

「まあまあ二人とも落ち着いて」

齊藤常務がゆっくりと二人を制した。ようやく自分の出番が回ってきたとばかりに、黄門役を演じ出す。

「証拠のない噂でやりあったところで何の生産性ももたらさないのは、賢明な諸君であればわかっていると思う。翻って本日の真の課題であるところの大関栄作営業部長と島田綾君とのいわゆるセクハラ事件についてもそれを証拠だてる物的証拠ならびに証言はひとつとして見当らないのがはっきりしたわけだ。あるのはただ当事者両人の主張、それも第三者からみればほんの些細な見解の相違と見えるところの主張の違いだけである。よってこれは岡崎晶課長の言わんとする『事件』ではなく、まったく両人のプライバシーに属する出来事であって、これに他者、それも一個の法人組織である会社が関与すべ

き問題ではないと判断できる。もってこれだけ世間を騒がせ、多忙を極まる業務の手を煩わせ、その進行を妨げた両人は社会人としての甚だしい自覚の喪失を指摘でき、深く反省を促すものである」

ようするに喧嘩両成敗、双方をけん責処分にする。実質的にはお咎めなしだ。

「それじゃ……それじゃあんまり……」

晶は震える声を絞りだしたが、

「これにて一件落着！」

齊藤常務は悪乗りして一喝すると立ち上がった。まるで示しあわせたように広田も大関も立ち上がった。綾までが、こんなところは一刻も早く出ていきたいと腰を浮かせる。

晶だけが腰が抜けてしまったように椅子に坐りこんだまま。

(いったい私は何をやっていたのよ)

そんな自問自答だけが頭を駆け巡っていく。

会議室の出口のところで、大関が後からついてきた綾に何やら話し掛け、あろうことか肩を抱いて出ていこうとしていた。

口を半開きにした茫然自失の晶と目が合うと、大関はふてぶてしくもウインクをよこす厚顔ぶりであった。

婿泣かせの尻、嫁泣かせの薬

沢口康彦は何かと妻、岡崎晶と比較され駄目亭主の烙印を押されているものの、一応、これでも総合商社の社員のひとりなのである。まあ、海外で派手な商取引を演じている大手ではないにしろ、関東から東北、北海道と東日本一円をエリアとする中堅商社なのだった。オフィスも一応青山に構えた、洒落たレンガ色のビルである。

準大手特有の見栄、みたいなものが会社全体にあって、機構は大手のそれとほとんど変わらない。週休二日だし、夏休みもきちんとあるし、福利厚生施設も立派だ。社員の健康管理にも気を使っている。

たとえば康彦がよく行く、三階のカウンセリング室——おもに社員の精神面の相談にのる医師常駐の部屋——の設置などは、社員の精神衛生面の管理が喧しく言われだした80年代後半にはすでになされていたのだった。

当初は管理教育に弾きだされ、行き場を失った中学生が保健室に駆けこんでいたのと似た現象があり、千客万来といった趣だったのだが、最近は落ち着いてきたようである。五月病で鬱症になっている新米社員とか恋愛の悩みで円形脱毛になったバカOLとか、訪れるのはその程度だ。

——他の者は気づいていないのかもしれない。

担当しているカウンセラーに最近、色気ムンムンの熟女医師が加わった事実を。不定期的に顔を出すだけだから、康彦のように窓際族で暇を持て余し、頻繁に通っているものでないと見逃すのも仕方がない。ここのカウンセリングを担当しているクリニックに新しく勤めだした女医なのだろう。康彦は偶然、胃薬を貰いにいった時に会って、以後、しつこく出勤日を聞き出しては彼女を主治医扱いにしているのである。

田中朋子——名前は地味目だが容姿から受ける印象は大輪のひまわりか。年齢四十歳。成熟したグラマーである。バストは九十以上はあるのじゃないか。白衣の前のボタンが引き千切れそうなくらいの巨乳だと思う。巨臀——そんな言葉があるのかどうか知らないけれど、あの晶のヒップさえ及びもつかないボリュームに溢れている。ウエストにはそこそこの脂肪をつけて、二段腹になる時もあるのだろうが、それがこの女の魅力を損なっていないように思われる。かえってまったりとした大年増の脂ぎるボディを演出しているのだ。

なにか見てきたような講釈だが、実は康彦は一度、朋子が着替えをしているところをまったく不可抗力で覗いてしまった経験があるのだ。控え室のドアが細く閉め忘れていたのである。無念にもブラジャーやスカートをつけたままだったが、身体のラインはすっかり拝めたのだった。ミルクタンクといっても過言ではない乳房をピン

クの下着に包んで、重たげに揺すり、セーターを着ていく姿の悩ましさときたら。妙にセックスアピールを消したがる晶と違い、この牝豚ちゃんはまったく自然に肉体を飾っている感じだった。

以来、康彦は朋子の熱烈なファンとなって足しげくここに通い詰めなのである。

晶に強烈な肘鉄を食らった次の日の午後も、康彦は上司の目を盗んでカウンセリング室へと向っていた。この日はドクター田中の診察日であった。

ドアを開けると軽やかなクラシックの調べが耳に流れてくる。

医療室ではないから独特の薬品臭もしない。

朋子はデスクに向って回転椅子に坐り、カルテに何やら書きこんでいる最中だった。

「あら、廉くん、もう来たの」

朋子は澄んだアルトの声で彼を迎えた。

「もう来たの、はないんじゃないスカ、先生」

「フフン、だってそうじゃないの」

白衣の女医は立ち上がって招き入れると、外来者用の椅子ではなく、部屋のちょっと奥にある、瞑想用の長椅子型ベッドへと連れ立った。康彦は大げさに精神分析医を必要とするノイローゼと自負しているのだ。まるでニューヨークで神経を擦り減らして働くビジネスマンのように。

康彦は靴を脱いでベッドに横たわる。朋子は傍らの椅子に腰掛けた。片手は白衣のポケットに突っこみ、片手で康彦のカルテを掴んでいる。もともと量の豊富なセミロングの艶やかな黒髪はウエーブをきつめにかけているためますますボリュームをふくらませ萌えるようだ。どちらかといえば丸顔だが、目も鼻も口も癖がなく、ちょっと厚めの化粧に鮮やかに輪郭を浮きだしている。

さて田中朋子医師はちっともカルテを読む気はないらしい。康彦がどういう腹の底でここへ通っているのかとうにお見通しなのだろう。

今日の朋子の白衣の下は黒のサマーセーター。胸もとがかなり開いているタイプで、なんとも色っぽい。やや雀斑が見られるところなんざ、洋物のポルノ映画に出てくる白人金髪熟女を彷彿とさせる。晶の美肌を見飽きている康彦にとって、かえって新鮮な魅力に映ったりする。

「廉くん、あんまり仕事、サボっちゃ駄目じゃない」

「ン？ いやだな、先生。サボってなんかいませんよ、いつも」

頭を掻きながらおどおどと白豚の胸もとからようやく目を離し、ムンと化粧臭の漂ってくる美貌を覗いた。瞳が悪戯っぽく笑っている。目尻に皺が刻まれるのは仕方がないが、かえってそれも大年増のエロチシズム……か。

(この女、おれが自分目当てに通ってるのを知ってるくせに、いつもつきっきりで相手になってくれるんだよな。仕事熱心といってしまえばそれまでだが、ひよっとしたら下心でも……)

康彦の希望的観測にはちょっとした確証もある。いつだったか今日と同じようにここに寝ていると、どこかの課の部長がおいでなすったのだが、朋子はけっこう本気でイラつき診断中を理由に彼を追い返してしまったのだ。伶俐な女医のヒステリーにはひどく驚かされた。楽観的な康彦ならずともこれは脈があると思いたくなるのが人情だろう。

それにこの朋子の笑顔。どこか作りもののような気がする。いや、内心を偽って無理に微笑んでいるのではなく、その逆。惚れてほしいオトコに見せる、女のここぞというときの笑顔、オトコを引き寄せるための色めき立つとびきりの表情――。

(いやあーっ、おれってやっぱり楽観的なのかなあ。でもこの女医、何年か前に自動車事故で旦那を亡くしてるって言うし、オ×××が疼いてたまらんのかもしれん) つまらない妄想に思わず康彦の鼻息が荒くなる。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

晶、内憂外患

午前六時半。

ごそごそと起きだして朝食作りをはじめると、亭主なんて、今の時代だってそういるものではないはずだ。しかもそれを嬉々として取り組もうとしているのだから、我らがヒーローは希有の存在といえる。

沢口康彦は最近ではこの朝が待遠しくて仕方がない。隣のベッドでは夜の遅かった妻がまだ布団をかぶって小さな寝息を立てているが、そこをそっと抜け出し、足音を忍ばせてキッチンへと向う。真夏のこの時期ではすでに日は燦々と部屋の中に降りそそいでいる。

(爽やかだね。まったく夏ってやつは！)

眠気なんて康彦にはないも同然。パジャマの上にエプロンをかけ、浮き浮きする気分で妻のための朝食を作っていく。淫らなブレックファースト。媚薬入りの変態食……。

あれからほぼ一週間になる。田中朋子女医の見立てによれば晶の体格や処方された薬の量から考えて、彼女の肉体になんらかの変化が出だすのが投与後約一週間ということだから、康彦の昂揚もわかるう。

フライパンにバターを引いて火にかける。パンをトー

スターに押しこみ、レタスの千切りをトントンと俎のうえでこしらえる。フライパンが暖まったとみるや卵を割ってジュッとおとした。これに生ハムとカマンベールチーズを切って添えればほぼ出来上がりだ。

もちろん忘れちゃいけないのがミルク。北海道産の低脂肪牛乳。冷蔵庫からパックを取り出し、康彦はその口を押さえてバーテンがカクテルを作るときにやるようにシェイクをはじめた。購入した時に朋子からもらったアンプルを切ってわずかな量の惚れ薬が入れられスクランブルされているが、ただ時間が経てば底の方に沈澱していくので毎朝バーテン稼業にいそしまねばならないのである。ミルクの量からすればそれはほんの0.01%くらいにすぎないので人間の味覚にはちっとも反応しないらしい。

それも一二分で終わり、透明なコップに注ぎこむ。見た目には何の変哲のないミルクだが、仕事とフェミニズムで一杯になっている女の頭を、セックス妄想だらけの淫らな女に変えていく恐ろしい秘薬入りミルクなのだ。男が飲んでも効果はないそうだが、朝は晶がミルク、康彦がインスタントコーヒーと決まっているのでいずれにせよ誤配の心配はない。

このカクテルを晶はもう一週間飲み続けているわけだが、康彦の目にはしっかりと現れた変化といえば、彼女の涎の量がやけに増えたくらいだろうか。朝、目覚める

と枕元のシーツにかなりの大きさのシミとなって残っているし、彼女の口の端からあごにかけてその残滓がカサカサになってこびりついていたりするのだった。

『私ってこんなにヨダレ垂らしてたっけ？』

と、夫に尋ねてきはしたけれど、本人はそれほど気に止めていない様子。康彦は胸をドキドキさせて女医に電話をしたが、別に心配はいらないという。しかしそれはそれで思う壺の兆候なのらしい。詳しい理屈はわからないが、性欲を促すホルモンを分泌させるための副作用として、唾液や汗も同時に分泌される。そのうち体臭も濃くなってくるのだそうだ。まったくどれもこれも助平女の特徴のようなものだが、まるで狼男のように全身がいやらしい肉体に変貌していくのだから恐ろしいものである。

さて今日はどの程度、淫らになっているのだろう、うちの奥さんは。

ちょうどトーストのこおぼしい匂いがリビングルームに立ち籠めた頃、晶は大きくノビをしながら寝室からヨロヨロと起きてきた。

「お早よう」と、康彦。

晶はまだ目覚めが定かでないのか、口の中でムニャムニャと言って、目を擦りながらそのまま洗面台へ直行だ。

康彦は玄関の郵便受けから新聞をとってきてテーブル

についてゆっくりと広げた。東スポが康彦の、日経が晶の愛読紙である。

(あいつ、今頃、口のまわりの涎滓、必死になってこそぎ落としてんだろうな。そう言えばなんとなく臭わなかったか。寝汗かな？ いや、そうとも思えないけどな)

ドぎつい見出しが乱舞する紙面にはほとんど注目せず、頭はすべて晶の様子ばかり。田中女史からは薬の注意事項とともにこうも言い渡されている。

『いいこと。この薬は奥さんの身体を変えるもの。でもそれだけなら意味ないわよね。薬をやめてしまえば元に戻ってしまうんだもの。重要なのは心を変える努力なのよ。奥さんの心にあなたという存在を大きく、いっぱい植えつけさせなければ駄目なのね。媚薬なんてそのための手段にすぎないのよ。廉君の存在がどんなに自分にとってかけがえのない存在であるか、男が女にとってどんなになくってはならないものであるのか、セックスのない一人寝の寂しさが女にとってどんなに辛いものであるのか——ここは真に迫っていた——夫婦にとっていかに性生活が重要なものであるのか、そういう常識を彼女にみっちり教育できなければ意味ないのね。だから廉君、奥さんが初期症状でこっちに心が向ってきたからといってすぐにホイホイと手を出したりしたら元の木阿弥よ。出来るだけ、冷たい淡々とした態度で接しなければ

駄目。彼女がね、会社で颯爽と光り輝くキャリアウーマンしてられるのも、実は廉君がもう幼稚なほど彼女を愛しまくっているからなのよ。好きだ、綺麗だ、オxxxしたい、そういう男の愛情表現を浴びれば浴びるほど、女の性ホルモンは正常に分泌され続け、健康美に輝く。だから欲求不満に陥れるのには蛇の生殺しみみたいになるけど晶さんを心を鬼にして無視するのよ。廉君も大変だろうけど、その時は私がいるわけだし……』

(なんだ、あいつ、結局はそれが言いたかっただけなんじゃねえだろうな)

大年増マゾのぞっとするほど色っぽい視線を思い出しながら康彦は首をすくめる。しかし医師としては優秀なのだ。それに今までこっちが求めても求めてもうるさがられていた復讐戦になるならそれも面白いではないか。あの晶が悶えに悶えて我慢仕切れずとうとうおれのベッドに滑りこんできて柔らかい女体を擦り寄せながら、

『抱いて！』なんていうのを、『仕事で疲れているからな』などとあっさり跳ねつけてやるのを想像すると、それだけで身震いするほどの快感が起こってくる。

(どうしたんだ？ おれ、サドになったのか？ 朋子の影響かい)

康彦は苦笑しつつ、それでも晶を愛する心は不変なのだからと納得したりもしている。そうだ、晶に対する意識はこれっぽっちも変わっていない、変態女医の巨きな

尻に押し潰されている時も、晶に内緒で悪さを企んでいる時も、おれは晶をまったく変わりなく、いや今まで以上に愛していたんじゃないか——。

”水戸泉、石田ひかり結婚へ”

新聞の見出しの部分を握り締めながら、康彦は鼻息荒く再認識しているのである。

洗顔を終えた晶が戻ってきた。

気とられぬよう、一応、臭いを嗅いでみるが洗顔液の匂いがきつすぎてわからない。晶はテーブルの、康彦とは直角になる位置に坐った。そこだと彼女の横貌が見える。美しい洗いたてのすっぴん。窓からの陽光が向う正面からさしてきてうぶ気のそよぎまで際立っている。三十とは思えぬピチピチした肌。

綺麗だね——今までの習慣ではここで思わず康彦がそう呟いているところだが、我慢、我慢。ブスッと無表情を決めこみ、新聞に視線を落としながらトーストにかじりつく。

それを朝食を作らせた不機嫌ととったらしく——もう交互に作りあうルールは完全になし崩しだったが——晶は照れ笑いを浮かべ、康彦の表情を覗きこんで、

「へへ、また寝坊しちゃったな。御免御免」

と、謝りながらミルクの入ったコップに手をかける。康彦の心臓が高鳴る。毎朝のことなのだがこの瞬間はいつも平静ではいられない。ああ、その一杯一杯がお前を

奈落の底へ落としていくのだよ……。

勢いよく、晶はゴクゴクと喉を鳴らしながら飲み干していく。

(オ×××が疼かないのか、晶！)

思わず尋ねたくなってしまう。

「ああ、おいしい。やっぱりアルコールの残った身体には牛乳が一番ね」

晶は頼みもしないのに台所へ行って牛乳をもう一杯、おかわりして戻ってきた。実は康彦が自分のミルクを飲む姿をあんまりシゲシゲと見ているものだから、これが気に入っている私の姿なのかと勘違いして、サービスのつもりでおかわりしたのである。

(この人、変な仕草が好きなのよね。胡坐をかいているお前は日本一可愛いとか、チャーシューメンを食べている晶は最高とか……。最近は毎朝牛乳を飲んでいるところ目を飛び出しそうにして見ているの、きっとこれが気に入っているんだわ。それならそうと言えばいいのよ。今までと同じように……)

しかしその晶にしても自分が夫に対して今日はとくにサービス精神を発揮したい欲求が高まっているのを自覚していなかった。そうした子供っぽい心理は晶の一番嫌う女性らしさなのに、である。

「お前、そんなにミルク飲むと……」

とうとう見兼ねたように康彦が口を出した。声を絞り

だすような感じである。

「ン？」

「……いや、なんでもない」

慌ててまずいコーヒーを啜る夫。

「そんなにミルクを飲むとどうなるの？」

「いや別に。下、下痢したら汚いと思って」

間抜けな取り繕いをする夫に晶はまったき白けて日経をガサガサと広げるしかない。

「今日、おれ、休みだから」

「そっか、今日、土曜なのね」

晶の出版社も一応週休二日なのだが、全然休めなかった。

「洗濯しておくよ。出しておいて。下着その他」

「え？ ああ、そうね……でもいいわ。明日自分でする」

急に動揺したように頬を心なしか赫らめ、晶は必死に目玉焼きをスプーンですくっている。

(こりゃ何かあるな) 康彦の三白眼が光った。

「いいよ。不経済じゃないの。洗濯機、一度ですむんだからさ」

「うーん。大事な旦那さんにパンツ洗わせるわけにもいかないじゃない。やっぱり」

悪戯っぽく笑う晶。鼻の頭に汗がテカリ出した。

「どうした、お前。熱でもあるんじゃないか」

「いやね。健康よ。だって最初に決めたんじゃない。自分の洗濯物は自分で処理するって。今までは私の怠慢で康彦さんに迷惑かけたけどこれからはきちんとやります」

そう言うと晶は長い指で小鼻の汗を拭うのである。

(ちょっと貌が脂ぎってきたんじゃないか。知らず知らずのうちに、物欲しそうな貌になってくるんだよなあ)

それにしても突然のこの洗濯宣言は気に掛かる。今までシミのついたパンティだってかまわず洗わせていたくせに今日に限って殊勝なこの言いようはどういう風の吹き回しだ。夫にも見せられない何かがあるのか。

(そう考えるほうが自然だよな。晶さんよ)

康彦は探るような目つきでストレートボブの妻の美貌を見つめているが、深追いをするつもりはない。どうせ彼女が会社にいけばしっかりチェックできるのである。

「ま、こっちはその方がいいけどさ」

無関心を装って再び東スポを見入る康彦。

「そうよね。うん……」

などと相槌を打ちながら晶もトーストを平らげる。そう言えばセクハラ部長との対決の会議はかなり前に終わったはずだがちっとも話題に出してこない。うまくいかなかったに違いない。あの日の夜は泥酔して帰ってきたし——康彦の方は田中朋子との爛れたまぐわい後で、しか

も秘密の媚薬を持ち帰った昂奮にそれどころではなかった——それ以降はまたまた彼女の残業地獄は続いているから、話し合う暇などこれぽっちもないのである。

（話を聞けば、おれ、どうせ慰めずにはおれないもんなあ。やめたやめた。シカトウ決めこもうっと）

康彦はつい気弱に流れる己れの心に叱咤して愛妻を無視し続ける。

しかし晶はなぜかポオーツと空になったガラスコップを見つめている。晶のこんな虚脱した表情をみるのは初めてだ。いつも颯爽として自信に満ち溢れ冴えた美貌を澆刺とさせている彼女である。

（もしやミルクの異変に感づいたのでは）

それはしかし無理な話。犬ほどの味覚能力があれば別だけれど。

もう朝食はあらかじめ終わっているのに、ぼんやりとコップをみやる晶。

「そろそろ行かないと、バスの時間、まずいんじゃない？」

ドキッとしたように壁にかかった時計を見上げ、晶は慌てて立ち上がった。

「着替えなくっちゃっ」

あたふたと寝室へ駆けこんでいく。康彦は落ち着いて新聞を畳むと、さっと身を翻して寝室のドアにへばりついた。細目に開けて、中を覗く。パジャマの下は素っ裸

だから、身体に何か変化が現れていないか確認するには絶好の機会なわけだ。

晶は洋服タンスの前でちょうどズボンから脚を引き抜くところだった。

(うーん……相変わらず素晴らしい身体だよなあ)

感嘆する夫。朋子のゲップが出るような熟れた肉の塊とは一味も二味も違う理想的な女性美がそこにはある。目の覚めるような雪白の素肌。バスト、ウエスト、ヒップとなだらかにくびれ、ふくらむラインは適度な肉を乗せて抜群のプロポーションを誇っている。腰部こそは巨きすぎる朋子のそれとは違って、たとえば裸女をデッサンするプロの画家からモデルにとスカウトされたとしてもいっこうにおかしくないほどの曲線美を描いている。上向きで垂れの少ない尻梁。逞しい太腿。後ろ姿はビーナスの像を見るような気分である。

(ちっとも変化のないのは喜ぶべきか、憂うべきか……)

晶はパンティを履き、いや、それを太腿まで上げかかったところで手がピタッと止まった。それはいつものベージュの地味な色の普通の下着で、彼女の好む物だったのだが。

(気が変わったのかな。もっと派手なランジェリー、履くべきか?)

しかしそうではなかったのだ。彼女が気にしたのはパ

ンティの方ではなく、身体の方、つまり陰部のたしなみの方であったらしい。康彦が息を飲んでいると、晶はベッドの枕元のクリネックスの箱を掴み取り、中から大量のティッシュを何枚も抜き取った。そして硬質でスポーティーな片脚を——康彦の側の脚だから生殖器は見え、尻たぶを晒している——くの字に曲げてベッドにかけた。

（朝っばらから大胆なポーズ！）

驚くのはまだ早い。美人妻は手に花びらのように持ったティッシュでもって、覗きこんだ股間を拭きはじめたのである。唇を噛みしめている彼女の貌は忌ま忌ましさと羞恥が入り混じって目元から頬にかけてほんのり色づいている。ティッシュは次から次へと使われ、すぐになくなってしまふ。取り合えず床に投げ置かれたくしゃくしゃのティッシュの状態はここからではさすがにわからないのだけれど、どうもかなりの汁分を含んでいるようにも見える。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

綾ちゃん、ぶっ飛ぶ！

朋子もベッドの中から電話していたらしく、どっとへたりこむ音がした。ベッドのバネが熟れ熟れの肉体の重みを受けてギシギシいっている。艶かしい衣擦れの音まで聴こえてくる。

「だから何色のネグリジェなんだよ、白豚！」

「あーん、黒っ、黒よ！」

畜生、黒のネグリジェ！ よりによって自分が晶にプレゼントしたやつと一緒にじゃないか。晶はほとんど見向きもせず、押入の奥で埃をかぶっている。彼女がそれをあの白い、美しい素肌につけて、今の朋子のように犬のような鼻息で自分を誘惑してくる、そんな現実がはたして本当にくるのか、廉君にはこの期に及んでも半信半疑であった。

「黒のネグリジェなんて、引き千切ってやる！ ビリビリ！」

自分で効果音を言わねばならないところが滑稽なのだが、朋子も完全にハマッている。

「ヒューツ——」

カチカチ歯が鳴っている。それどころか、本当に腕に力が入ってしまったらしく、生地が引き裂かれる音が聴こえてきた。康彦も男根を握った手を激しく上下させ、ますます演技にのめりこんでいく。

「医者のかせして巨きな乳しやがって。そんなに男に

揉まれたいのかア、おんなっ！」

「か、堪忍してくださいましっ」

朋子はたぶん自らの手で乳ぶさを揉みし抱いているのだろう、何か汗まみれの柔らかい肉がタップと捏ね繰られる猥褻な音が受話器の底になずんでいる。

「白豚！ 跪いて男性様に挨拶しやがれ！」

一度、肉交を結んでいるマゾの朋子ではあるが、面と向うとやはりそこは医学博士のご威光なのか、気弱な康彦はどうも萎縮してしまうのであるが、これならば罵声も持続するのであった。

「雀斑だらけの汚い肌しやがってっ、それでも女か！ 乳頭捻り潰してやる！ ギイ！」

「ゴムのように引き伸ばしちゃ、いやああーっ……うぐぐ……」

最後の口ごもりはきっとチ×××を啜えたという演技なのだろう。康彦も亀頭部をわし掴んで呼応する。

(う、う、漏れちゃいそう……)

続いてハアハア、うんうん、チュパチュパ、口技の艶かしいくぐもりが聴こえてき——こいつ、本当に、何かしゃぶってるぞ——朋子の淫熱に擦れた声が囁かれる。

「……や、廉君、早く来てっ。もうたまんないわ。これじゃ晶さんより前に私の方が生殺しでどうにかなっちゃうっ。今すぐ来てくれないと薬、もう出さないから。廉君、わかった？」

「え、ええ、わかりました。これからお邪魔します……」

突如、素に戻り、情けない裏声で返事をする廉君はつい三秒前に暴発してしまってそこいら中に白濁を飛ばし、狼狽えていた。

（まあ、いいさ。一発くらい抜いておいたほうが、あの助平女には長持ちしていいだろうよ。それでなきやまたりボンで縛られちまうかもしれんもんなあ）

電話を切って、そう思い直したまでは良かったのだが、そこが晶のベッドの上だったのに気づき、またがっくりだ。晶の分泌液の粗相を探していたのに、自分が粗相の痕をつけてしまった。シーツを洗う手間がまたこの主夫に加わったのである。

康彦は忌ま忌ましそうに萎んでいく自分の性器を指で弾いていた。

——そんな粗チンとは比べものにならないデカ魔羅の、天を衝くしなりを頼もしそうに撫でている男がいた。

ここはビジネス街から程近いモーテルの一室。

大関栄作は大きな仕掛けベッドに胡坐をかいて、彼の視線の先で縮こまっている小羊に向かって因果を含めていた。

「島田君。そんなもんで詫びになると思っているのかい」

部屋の角に茫然と立ち尽くし——もちろん全裸の部長からは目を背け——ブルブル震えている島田綾は愛らしい制服の前で両手をもじもじと交差させていた。今や綾は大関に恫喝される哀しい身の上である。責任ある地位にいる男性を虚実を用いて葬りさらんとした不屈き者——それが彼女である。たしかに妊娠したなどと嘘をついたのは非常識だったが、会社の処分ももらったし、同じけん責を食らったはずの部長からなぜここまで言われる筋合いがあるのだろうか。それにあの事件はなんといっても彼が仕組んだ罠であるのはもうはっきりした事実のはずである。それを言うに事欠いて、謝罪しろとはとんでもない話なのではないか。

今日の昼休み、いつもと同じように同僚たちと食事に出掛けようとした綾をいきなり廊下の影に誘いこみ、

『今日こそは誠心誠意、謝罪してもらおうよ』などと囁かれ、肩を抱かれるままにタクシーへ。そしてこのいかがわしいホテルの一室へと連れこまれたのだった。

抗議する間もなく、大関は素っ裸に衣服を脱いでしまった。これは大関の高等戦術。しらふの女をこっちのペースに巻きこむには、本人を裸にするか、さもなくば、男性の全裸を見せつけ、ガーンと一発、ショック状態にして出鼻を挫いてしまう戦略がいい。可哀相な綾ちゃんは術中にハマってベソをかきながらオロオロとしてしまっている。この間の事件では身体を奪われたとはいえ、

アルコールが入っていたので大関の肉体の隆々とした男らしさにはそれほど恐怖を抱けなかったのだが、真っ昼間、こうしてアレヨアレヨというまに相対する段になってみると、部長の肉体は狂暴で威圧的で、とくに先程からチラチラと視界に入ってくるあのオチ×××の巨きさときたら、あの年齢でよく、という思いと、あれを体内に挿入されて自分の身体が壊れなかったものだという畏怖とが、改めて混ぜ合わされて、彼女の心は完全に大関の肉体に支配されてしまったようだった。

「ほら、そこに正座して、三指ついて悪うございました、と謝るんだっ」

部長のイライラした大きな声を聞くと——それはいかにも体育会系出身の声量のある怒声だったが——綾はカーッと頭に血が昇り、思考がなくなってしまう。

しもぶくれの、白ムチの貌。その若い頬を朱に染めて、ムッチリした唇を噛みしめるように、思わず、ハイ……と頷いてしまった。変形ポンパドールの黒髪がハラリと横顔を隠し、綾は恐る恐る毛足の長い絨毯の上に跪いていく。

「もっと、近くでやらにゃ意味ないだろうが！ 島田あっ、パッパパッパとせんかあ！」

名前を呼び捨てにされた驚きと屈辱よりも、鼓膜が痺れ頭が割れるような大関の怒鳴り声に心底怯えてしまった綾ちゃんは、ただただもう二度と聞きたくない一心

で、抜けそうな腰を持ち上げ、幼児のようにハイハイしていく。

(こんな時に岡崎晶課長がいたら……)

それはそれは十人力百人力の味方になってくれるに違いないが、あそこまで恥をかかせ、裏切ってしまった課長である。いまさら何を頼めよう。彼女とは職場でも出来るかぎり視線をあわせないようにしている。

大関部長の牡臭が鼻につく距離まで近づくと、綾は必死に時代劇を思い出す。

(三指つくってどうやるんだっけ……。あーん、水戸黄門、もっと観ておくんだったなあ！)

今更、後悔しても始まらない。絨毯の上にパーを出したり、チョキを出したりしている綾ちゃんに直ぐ様大関のカミナリがおっこちた。

「貴様ア、このおれをおちよくってんのか！」

「ち、違います……」

腹の底から絞りだしてくる大関の空気を震わすような声に綾は平身低頭、謝りまくるのだが、なぜ自分がこんな真似をせねばならないのか、いっこうに腑に落ちない。しかし、無意味な弾圧ほど人を恐怖させるものはなかった。この巨大で屈強な男に頭ごなしに怒鳴りつけられれば、本能的に背中が丸くなり頭ががっくり下がってしまう。ビンタを頬に食らったように目の前に星が飛んでいる。心臓がドキドキ口から躍り出てきそうで、おし

っこまでチビリそう。これはきっと女の本能なのだった。

「いいから、土下座してみなっ」

多少、大関の調子のトーンが下がったので、綾は藁をも掴んだ気分になる。彼のこの機嫌を損ねてはなるまいと、全身で媚を振りまく。

「ハイッ、そうしますっッ」

元気な返事をして、綾はきちんと膝を揃え、へへエーとばかり土下座をするのである。黒々とした頭髪が可愛いほっぺを撫で隠し、はち切れそうな現代娘の、健康優良児的女体は卵形に這いつくばった。

(こんな小娘、大関様の鼻息がかかっただけでこのザマよ)

ますます肥え長くなる一物の裏側をゆっくりと擦りながら大関部長としてもそう悪い気はしていない。まず自分の人生で最大級の危機を踵で残して反撃に成功し、今まで通り、いや今まで以上の地位を会社に築いた満足感で最近は何をやっても調子がいいのだ。さらにその危機をもたらした張本人であるところの小生意気な島田綾を一喝しただけで足元に平伏させた快感が彼のサディズムを酔わせないわけがなかった。何しろ彼くらいの遊び人になると単なるレイプまがいのセックスや、SMプレイなどにはかなり食傷気味なのである。趣向を替え、まったく暴力を使わず女を隷従させる遊びも楽しかろうと目

論んだのだが、それは凶星に命中した。

(れっぱくの気迫だけでおれに齒向かった女が額を床に擦りつけているわけだからな。久々の昂奮ショウといえる。しかし、相手があの岡崎晶となると、こう簡単にはいかんのだろうが……)

そしてその岡崎晶課長をこうして恐れ入りましたと土下座させられたら、きっと昂奮は今の比ではないのだろう。大関は眼前に頭を垂れている制服姿の綾が、三十になってもちっとも衰えないプロポーション——それどころかますます魅力的になっていく——を颯爽と闊歩させ、憎らしいほどの美貌を凍りつかせて上司であるはずの自分に盾をつき、善戦及ばなかったもののあわやのところまで追い詰めてきた、才知たけた晶の姿にダブって見えてくると、もちろん魔羅の昂奮はますます募ってくるのだが、と同時に彼女を陥れる難しさ、彼女を侍らせる不可能さに思いがいき、かえって強烈な忌ま忌ましさがかみ上げてくる。

(あの肉感的な鼻を摘み上げる日がいつか来るのだろうか)

しかし大関には今や不可能の文字はないのだった。必ずやカタキの女闘士を手中におさめ、一泡も二泡も吹かせてやる所存である。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

美肉に涌いた淫ら蟻

晶は大口のクライアントである○△食品を回った後、いったん社に立ち寄った。

岡崎課長はどこへ行ってもとりあえず人気者である。彼女の美貌は本人の意図に反して顧客勧誘の大きな武器になっている。もちろん実力もあるのだから、美しさに油断してるとしたたかな分析と計算に裏打ちされた舌鋒で営業サイドの有利に契約をまとめ上げられてしまう。

『きみにはかなわんよ、まったく』

鼻の下を伸ばしているようなクライアントは苦笑しながら契約書にサインするわけである。バブル崩壊後の未曾有の広告不況にあるこの業界で彼女の出版社がなんとか持ちこたえているのは、皮肉にも、彼女のこの才色混ぜ合わせた実力と、大関栄作部長の人脈なのだった。

すでに彼女の社の入っているビルは午後五時の退社時間を回っているので、消灯されているフロアも多い。いつもながらこの時間に玄関ロビーを横切り、一人、エレベーターに乗って昇っていくのは頸の辺りが竦むような寒気を感じる。

晶は着ていたジャケットを脱いで手に抱えている。半袖のTシャツ——どこかのバーゲンで手に入れたような無地の黒のシャツ——と白のスラックス姿。シャツは胸もとがやや広めに開いているので、少しは目を楽しませてくれる。金のチョーカーが揺れるそこは外の真夏日、不快指数90のべったり貼りつくような酷暑によって汗に滲んでいた。ストレートボブの黒髪は涼しげだけれど、さしものスーパーレディも働きすぎなのか、夏バテ気味で疲労が貌にきている。切れ長の、鳶色の瞳の目元にうっすら隈が見えるし、肌もやや荒れ模様。しかしそれがまったき夏バテ疲労だけのせいかといえ、そうではないのは読者のもう知っているところであろう。彼女の肉体の内部からジワジワと蝕む悪魔の淫薬によっていらぬ消耗を余儀なくされているのである。

そう思って改めて彼女に注目すれば、小鼻の脇の脂ぎり方、濃い目の体臭を押さえるための香水の使い方——もちろん普段は使わない——等に異変が見られるのだった。

当人もその事実に気づいていないはずはない。しかしそれがまさか夫である康彦の奸計の果ての症状とは夢にも思わぬ真相である。もともと健康で病院嫌いでもある晶はたとえば涎の量が多くなったとか、愛液の分泌が増えたくらいで医者に診てもらおうなんて頭もいかないのだ。

(やっぱりアレのご無沙汰なんだな。女も三十になるとえげつない反応になるんだ)

その程度の苦笑で済ませてしまうのが我らのヒロインの感性である。しかし確実に彼女の肉体は人工的な色情の昂ぶりに参ってきているはずである。いや、肉体ばかりでなく精神も少なからぬ影響を受けているのだった。

ビルの五階のワンフロアが岡崎課長の勤め先である。営業部の明かりは煌々とつけられていた。

晶が入っていくと中は閑散としていたが、ひとつのデスクだけがモリモリと活動中であった。まずいことに——当然といえば当然なのだが——そこは大関栄作のデスクである。何しろ同じ職場の部長と課長であるから、こんな遭遇は珍しくもないはずだが、そう言えばあの対決以来、面と向う機会はなかった。

晶が部屋に入っていくと、大関部長はその立派な体躯を窮屈そうにデスクの中に押しこんで一心不乱に書類を書き綴っている。経費節減とかで冷房の温度も押さえ目にしてあるため、室温は三十度近くに達していた。大関の着ている半袖のワイシャツは汗でべっとり身体に貼りつき、中のアンダーシャツが透けて見えている……。

——心配していた大関一派からの反撃は少なくともここまではその端緒も発動されていない。こういうセクハラ事件の時には男の怒りは凄まじく、男性側が有罪であっても何らかのしっぺ返しをこうじるものだし、まして

無罪放免となればあけすけないやがらせや圧力をかけてくるものだと、世話になった弁護士が言っていた。中には左遷され、退職に追いこまれるものも多いらしい。あの大関だからきっと激しい中傷攻撃を仕掛けてくるのではないかと、晶はある程度、覚悟していたのだ。しかし予期に反してまったくその兆候は見られなかった。大関はいつものようにファイト満々で仕事をこなしている。晶との折衝もビジネスライクに割り切ったものである。いささか拍子抜けの感は否めないが、晶としてもまだ身構えは崩していない。嵐の前の静けさかもしれぬ。あの対決で見せた大関のしたたかさ、今の地位への強烈な執着心を考えれば、何事もないと考えるのは早計であるに違いないのだ。

とは言うものの、仕事場での大関栄作がまさに有能な上司であるのを認めざるをえない。エネルギーでバイタリティに溢れ、容易に腰を割らず、食いついたら最後まで離さない営業屋の鏡のような男である。あんな醜聞が年中行事のようについて回っても、結局は会社側が彼を選択するのも理解できなくはないほどだ。

大関のこの仕事姿……なるほど若い女の子がくらくたよるめくのもわかるう。身体がモクモクと大きく、筋骨隆々で自信に満ち溢れている。真剣なタカのような目つき。ちょっと白いものが見えるロマンズグレーの頭髪。煙草と汗の匂いが入り混じったような体臭はまさにフェ

ロモン。いや、若い娘たちだけではなく、今の晶だって扉を閉めたのはいいが、その場に立ち尽くし彼の姿にボォーッと見惚れてしまっているのではないか。どれも夫、康彦にはないものねだりの代物だ。フェミニストにとってはこうした『男らしさ』こそ、過去の異物、男性社会が作り出す妄想、つまりジェンダーであるはずなのに、もちろんフェロモンに鼻を擽られてその常識を忘れさせるのは、体内で反応する例の薬のせいであるわけだ。頭ではなく子宮の疼きに、彼女は引きずられ始めている。しかも相手は大関栄作。薬の効果の程が忍ばれる。

とくにワイシャツの貼りついた遅しく広い背中があぶない。ふと、ああいう背中にすがりついて甘えてみたい、などといった信じられない妄念が脳を支配してしまっている自分に、彼女は気づくのに遅れている。

「岡崎君——」

大関は書類から目を離さないままに声をかけてきた。

「っ……」

「そこで何をつっ立っているんだ。ここへきて報告したまえ」

びくっと我に戻った晶はそれ以上ないほどの赤面である。湯上がりのようにパァーッと顔面、そして胸もとまで紅潮している。『羞恥』とはこんな時に用いられる言葉であろう。いくらセックスから遠ざかっているからといって、まさに涎を流さんばかりの——昨日の今日であ

る。晶は思わず己れの口元を手で振り拭ってみる——性的欲求に脳のほとんどを支配されるとはまともな女としてこれほど羞かしい姿はない。それもよりによってセクハラ上司として自ら追及してきた大関のような男を対象にである。一瞬たりとはいえ心を奪われるだなんて今までの全人生を否定されたような気分にもなってしまう。しかしこの場合、大関に非があるのではなく、もっぱら晶自身の問題なのだった。

（ああ、やっぱり私、どうかしてるわ。康彦さんに優しくしてもらわなくちゃ……）

晶は慌てて大関とは似ても似つかぬタイプの夫の顔を思い浮べるのである。

「どうだったの？ ○△食品の佐々木さん？」

大関は初めて顔を上げてデスクの前に来た晶を凝視する。すぐに部下の報告を待つだけの眼の色ではなくなった。岡崎晶が尋常でないほどの真っ赤な貌をしているのだ。この牝狐が上司の前で動揺をみせるほど殊勝なタマでないのはわかりすぎるほどわかっている。新人の時だってフンと人を小馬鹿にしたような肝の座った態度だったし、あの事件の後も、顔色ひとつ変えない女なのである。それがまたどうして……。大関は興味を持ってしげしげと赫らの美貌を覗きこんだ。

晶はしどろもどろになって報告するが、大関の鋭い突っこみにさらに混乱の極に追いやられる。大関も有能で

鼻持ちならない部下の狼狽えぶりがおかしくて、散々からかってやる。

「どうしたんだい、岡崎君？ 君らしくもない。新人みたいな報告しか出来ないなんて。全然、要領を得てないじゃないの。身体の調子でも悪いのかね。貌、真っ赤だよ。血圧は正常？ すごい汗だよ。君、汗掻きだった？」

たたみかける大関に、いつもの晶なら的確に反発するところだが、情けないほど頭が混乱して言葉さえもつれている。

「いいよ。わかった」

と、大関はイライラを表現するように書類をパタンと閉じる。

「後は私がやるから。君は帰って少し休んだほうがいい。いや、私が悪いのさ。少し君に甘えて働かせすぎたのかもしれない。今日はもういいから、早く帰ってご主人と水いらずの時間を過ごしたまえ」

そう言って大関は常々はゲスト用に置いてあるタクシーチケットまで渡してくれた。さすがにそればかりは辞退して、しかし晶はほうほうの体で部屋を飛びだしたのである。

切齒扼腕とはこのことだろう。今にも涙が流れそうになるのを堪えるのがやっとなのである。

新宿のオフィス街には星のない夜のとぼりが人工的な

照明にぼかされてぼんやりと落ちているのだったが、晶は都会の回廊を目的を失って歩き回っている。

こんな屈辱的なしっぺ返しなら、まだ中傷攻撃の方がいいとまで思う。ああ、とてもたまらない。大関如きに同情されるなんて！ これでは窓際族の扱いだ。ほめ殺しだ。今まで身を粉にして働いてきた苦労はどうなるのか……。

そしてそのきっかけがなんとも情けない。あいつの男性的な魅力にひきずりこまれたあげくなのである。これでは島田綾の幼い偽証も笑えない。いやいや、それ以下であろう。口では彼女に大関追放を焚きつけておきながら自分はというと、人妻の身も顧みず浅ましい欲求にすっかり動転してしまっているのだから。

自他ともに認める竹を割ったような日頃の性格は嘘のように影を潜め、じくじくと堂堂巡りの悔恨に沈み切る晶である。

「ようよう、おねえさん、お茶でもしない」

「？……」

見ると軽薄そうなアロハを来たサングラス男がガムを噛みながら声をかけてきたのだった。どう見ても千葉か群馬辺りの不良だ。ナンパされてるのだ。グルグル歩き回っているうちに歌舞伎町の方へ来てしまったらしい。

「いいじゃないのさ。おねえさん、その歳で誘いをかけられるなんて幸せと思わなくっちゃさ」

男はしつこくつきまとう。さすがにあの薬が効いているといってもこんなバカには心を揺さ振られない。いや、まだまだ投与の初期で『雄なら誰でも』の段階までにはなっていないのかも。これで症状が進めば、こんなバカ相手にでも……。

「けっこう、物欲しそうな貌してるじゃないの」

男が晶の貌を覗きこむように言った。これが彼女に火をつける要因となった。

いきなり晶は持っていたハンドバックで男の顔面を殴りつけた。

「アヒッ！」

男は悲鳴を上げてもんどりうつ。転んだところに長い脚でキックにいったがこれは空振り。しかし男を震え上がらせる効果には十分であった。

「舐めるんじゃないわよっ。あなた、私を誰だと思ってるのよ！ あなたみたいなオカマ野郎に気やすく声をかけられる筋合いの女じゃないのよ！」

道行く人がこちらを振り返るほどの大声で啖呵を切った。可哀相なのは男である。完全に晶の素性を勘違いして土下座せんばかりのパニックぶりだ。

「し、失礼しましたっ。てっきり気質の女かと思いまして！」

ペコペコ頭を下げるのだが、晶はすでに踵を返して雑踏の中へと駆け去っていた。男はポカンと口を開け、軽

蔑の視線を送ってくる通行人の足元にへたりこんでいた。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

助教授夫人を演ずる変態女

「そろそろきたようね」

ソファの上でお行儀悪く胡坐をかいている沢口康彦に、田中朋子は自分のこめかみの辺りを指でグルグル円を描いて冷淡に言っただけ。ウイスキーのグラスを抱えて嬉しそうに妻の変貌を語る康彦に激しいジェラシーを覚えながら、朋子は床の絨毯に直接巨きな尻をおき、彼の足元に膝を立てたエロチックな姿勢でそのソファに寄り掛かっている。

ここは彼女のマンションの応接間であるので、まったくリラックスした艶姿を晒していた。黒のスリッパをつけているものの、片方のストラップが二の腕を滑り落ちて、支えを失ったカップの部分も肌けてしまい白い豊乳のひとつがブルンとあらわになっている。パンティも取ってしまったらしく、胸につくほどに立てた美しい脚

——四十女とは思えぬスラリとした膝下と、そして網膜が滲むほどの逞しい太腿が屈折していた——の奥深くにはランジェリーの人工的な黒よりもヌメるような輝きを帯びた恥毛すら見え隠れしているのである。

モクモクとウエーブのかかった黒髪は無機質な医務室にいる時よりもさらにボリューム感がだされている。今夜もムツと嗅覚を刺戟するほどその美貌には隙なく厚化粧が施され、挑発的なパープルのアイシャドウ、ドぎついショッキングレッドのルージュが牝狐の夜を飾っていた。彼女もアルコールを含んでいるらしく、首筋から胸もとにかけて赫く灼けていて、そこだけは歳を隠せない雀斑が目立っているようだ。

淫らな娼婦の如きエロチックな大年増が医学博士然とした言葉を吐く様はなんともアンバランスであるのに、廉君ときたらそのエロにもナンセンスにも気がつかぬようにヒヒヒと笑いながらまだ夢の中の映像を追っているようである。

「晶の奴、自分からおれのベッドにもぐりこんできて、『抱いて……』だと。あれはケツサクだったね。心の中で喝采を叫びましたよ、このおれは！」

はしゃぐ康彦に朋子はひどく自尊心を傷つけられるのだが、ようやく自分のマンションに通わせ始めたこの若い愛人にイカれているのでじっと我慢している。口から飛び出しそうな女々しい痴話の言葉を精神分析医の理性

だけで押しとどめ、代わって胡坐の底で半勃起状態にふくらんでいる康彦のペニス——康彦はすでに全裸である——を黒のマニュキアを塗った長い指でピンと弾いた。

「それで……」

と、朋子は喋りかけたが、自分の声が余りに擦れているのでびっくりして——たぶん苛烈な嫉妬に喉までやけてしまったのだ——慌てて咳払いをすませ、声の調子を整えてから続けた。

「それで晶さんはベッドから転げ落ちて腰が抜けてしまった？」

「そうそう。もう自分でも混乱しちまったんだろなあ。半ベソかいてさ」

「そして自分のベッドへ戻って布団をかぶって泣いていた？」

「そうそう——」

「その後、マスターベーションに耽った様子はなかった？」

「先生にも言われていたから、随分注意してきき耳を立てていたんだけど、それはなかったと思うよ」

「ふーん……」

朋子は気のないふりをして康彦のチ×××を弄んでいる。赤黒い亀頭を親指と中指で摘み、人差し指で鈴口のまわりを軽くつついてやる。

「ン？ 先生、それでどうなの、晶の状況は」

「普通だと思うわ。平均ペースで淫らになっていく……」

あまりにも悔しいので、美人女医は口にするのをはばかったが、ここまできて、つまり媚薬の投与を始めて数週間経過した今となっても、最後の拠り所である夫に袖にされたのに自慰行為へ流れなかったのは、朋子にとっては驚きであった。過去のデータが指摘するのは、この薬が骨の髄までしみこんだ女が夫の冷遇に遭遇した場合、女のたしなみも慎みも砕け散ってしまって激しいオナニー行為に出るのが常なのである。それは多分に冷たい夫へのあてつけ、または浅ましい挑発の意味も含まれるのだろう。もちろん爛れた肉欲のおもむくままに身体が蠢いてしまうのである。岡崎晶へ処方した薬の量、期間を総合すればこの三角関係のライバルの脳髓を侵すに十分なほどになっているはずなのだった。なのに悔し泣きに泣くだけでxxxに指がいかないのは何故だ？ 医師の指示に従わず、康彦が妻に憐憫の情をかけて自らの判断で量を減らしたのか。彼の無邪気な言動や朋子に対する信頼を考えればそれはありえない。あるいは晶の体格や体力が朋子の予想越えて逞しかったという推測は成立する。康彦の彼女のサイズに関する申告もアバウトなものだったし、この媚薬は使い方を誤ると性中枢に回復不能のダメージを与えかねない代物なので、つい匙加減が

抑え気味になった影響もあろう。最後のケースとしては——そしてこれが朋子の最も危惧する、しかし最も可能性のあるケースであるわけだが——晶の体力だけでない強靱な精神力の強さ、それに裏打ちされた康彦に対する愛情の深さである。自分の肉体がどうなってもかまわぬほど、晶は康彦を愛している！ 愛している男の前で己れの肉欲にのみ衝き動かされてマンズリこくような真似は、晶には出来なかった。きっと拷問のように辛い一夜を明かしたに違いない。シーツを握り締め、枕に貌を埋め、上の口からも下の口からもヨダレを垂らしながら、ちょうど麻薬を断たれた中毒患者のような苦しみに藻掻きながら朝を迎えたに違いないのだ。朋子はこの一度も対面していない宿敵に対し、深い深い哀れみと憧憬の念を一瞬持つのである。岡崎晶は康彦が思っているような冷感症の女ではまるでないし、素直な感情よりも既成の理屈に従って行動するような頭でっかちのイデオロギストでもない。ただ正義感が強く、極度の恥ずかしがり屋——己れのあらわな気持ちを表現できないほどの恥ずかしがり屋であるだけなのだ。その実質は案外古風で惚れこんだ男には身体の芯まで首っ丈の純情を兼ね備えているのだと思う。

なのにこの馬鹿夫ときたらまるで自分の女房を理解していない。女心のひとつも推し量れない。ばかりか、恋女房の乱れた変貌ぶりに子供のように手を叩いて喜んで

いる。そんなことだから心に出来たちょっとした隙間に女郎蜘蛛が垂らしこんだほんの一滴の毒にあっさり染まって彼女を疑いやまぬ人形に成り下がり、女郎蜘蛛の言いなりに操縦されているのである。

(私ってヒドイ女……)

晶に対する一片の同情心を持つとともに、そう胸で呟く朋子だが、やはりそれは一瞬の躊躇であった。他人の一人寝の寂しさより、自分の一人寝の寂しさの方が重要に決まっている。苦しいのは私だって一緒。ベッドの上で肉の渴きにのたうち回るなら、こっちの方が先輩よ。そして平和なデックスの夫婦生活を一時でも掻き乱すちょっとした悪戯心の誘惑もアブノーマルな性技に馴れ親しんでいる朋子にとっては断ちがたいに魅力にとんでい。サディスチンのドぎつい衣装の似合いそうな熟女だが、一皮剥けばとんでもないマゾ牝、白豚であるのに、どこかにやはり嗜虐の資質も隠されているのかもしれない。

(フフ、晶、みてなさいよ。もうすぐあんたは肉欲にひれふして私と同じような変態になるんだから。屈折したあなた特有の貞淑さなんて子宮の奥で融けてなくなってしまっただわ)

晶への同情も自らの行為の後ろめたさもあっという間に消し飛んで、女医の眼にはゆらゆらと紫色の炎が揺らぎはじめた。

「そのうち夜だけじゃなくて、日の高いうちから求めてくるようになるわよ、奥さん」

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

迫りくる淫影

その日、大関英作は田園調布の自宅には戻らず、都内某所に隠し持ったマンションへよることにした。ここはバブル華やかかりし頃、財テクのために購入したもののだが今となっては売るわけにもいかず、かといって賃貸するのも煩わしくまったく遊ばせてある5LDKである。もちろん大損を被ったわけだが、大関家の財力からみればとるにたらないものなので、彼としても僅かばかりの失点という意識しかない。それにここはウォーターフロントなので眺望も悪くないし、会社からの距離も手ごろだから良からぬ悪事の示しあわせには重宝しているのだった。

密談の相手——当然ながら私立探偵の山形欣治であるが、ヤマさんは大関よりも一足早く来ているようである。広い間取りの玄関のたたきに黒革の靴が置かれてい

る。そしてその横に寄り添うように白いハイヒールが並べて脱がれていた。

玄関からリビングに入ってみるとヤマさんはそのハイヒールの主とすでに全裸で抱き合っていたのだった。

「部長オーツ——」

甘えた子供っぽい女声が弱々しく大関の耳に届いてくる。

「こいつ、おれと繋がっている最中なのに媚びた声を出しやがってっ」

だってェ——舌足らずの悲鳴を塞ぐようにヤマさんはその女の腰を激しく衝きまくった。

「ヒィィーツ」

その悲鳴には屈辱を訴える色合ばかりでなく、媚を含んだ遣る瀬ない性欲の疼きも混じっている。

「綾、早く来すぎたのが運のつきだったな」

大関は苦笑しながら上着を脱ぎ、ネクタイを緩めると、ソファには坐らず彼らと同じように床に腰を下ろした。ヤマさんに抱かれているのは大関の会社のOL、島田綾である。全裸に剥かれ19歳の若い身体をヤマさんの鍛えられた逞しい体力に揉みぬかれているといったところだ。汗を全身に掻き、黒髪がグシャグシャになっている。髪の毛をこういう風情にするのはどうやらヤマさんの好みらしい。もうひとつ、彼女の白い胸には黒光りした荒縄がその上下をきっちり締めあげていた。手は拘

束せず、ただ胸だけを戒めている。若さ漲るデカパイの彼女にはふさわしい装飾といえた。

ようやく綾の可愛らしい唇から離れると、ヤマさんは魂まで吸い取られたように惚けた表情になっている彼女の鼻を摘んでこう叱りつけるのである。

「おい、島田っ。てめえ、いつまでたってもチュウのやり方を覚えねえな。それじゃ高校生か、下手をすると中学生以下のレベルだぞ。まったく覚えの悪い馬鹿〇しめ。今夜はもう一度やりなおし、朝までみっちり特訓だっ。眠れると思うなよ！」

「そんなああ」

甘えた綾の抗議を封じるように、一段と腰を迫りだして子宮を頭突き、悲鳴を絞り取った。そのまま一発見舞ってやるのかと期待していた大関の予想に反して、ヤマさんは綾を突き飛ばして結合を引き抜いた。

「オラッ、とっとと大事な部長さんの酒とおつまみを作ってきてな」

俯せになって氣息えんえんとしている綾ちゃんのこんもりと丸い双臀をピシャリとやる。ビクッと身体を震わせた彼女、重い身体を細っこい腕でなんとか持ちあげ、そのままズルズルとキッチンへ這いずっていく。胸を縛っている縄には縄尻が長く余っていてそれを掴んでいるヤマさんはまさに牝犬調教師である。

セクハラ騒動以降、島田綾は完全に二人の娼婦と成り

下がっている。発端は綾が強姦まがいな身体を奪った大関部長へ、一矢報いるためについつい行なった妊娠の偽装をかえって逆手に取られ首に縄をかけられてしまったのだが、今ではすっかり大関の愛人生活に馴染んでいた。こんな億ションの鍵をもらっているし、小遣いだって給料に匹敵するほどの額となれば、なにもお茶汲み・コピー取りのつまらないOLに甘んじているものでもあるまい。もともと大関の男性的魅力にはそそるものを感じていた綾である。仕事は社でもトップのやり手だし、中年の魅力にも富んでいる。加えてあの逞しい身体。学生時代、ラクビーで鍛えた屈強な肉体は衰えを知らず同年代のオジサンにみられる醜い脂肪ぶとりも彼には縁遠いものなのだ。ちょっと危険そうな雰囲気も悪くないし、名門の出のステータスもミーハーな現代娘には輝いて見えるのだろう。だからこそ酒の席で大関が自分に言い寄ってきたとき、アルコールに酔わされたのもあるが、まんざらの気持ちでもなくつい誘惑に乗ってしまったのだ。その後の確執は自分の本意ではなかった——と、綾は大関に諭されたように理解しはじめていた。やはりあんな堅物の岡崎課長なんかに打ち明けたのが間違いだったのだ。もっと、すいも甘いも噛み分けた大人だと思ったのだが、どんどんと話が破裂になっていき、結局大恥をかくハメに。やっぱり女の頼りになるのは同性ではなく男である。それも部長のような強い男であ

る。めくるめく彼との性交渉も綾を虜にしていた。いや、ひょっとするとすべてはこれに尽きるのかもしれない。綾の知っているどんな男性よりも部長の精力は強く逞しかった。アレの巨きさも並み外れている。技巧は口惜しいほど壺を心得ていて、綾は必ず失神をとまなう絶頂を迎えられた。億ションもブランドものの高価な衣装や装飾品も色褪せて見えるほどだ。大関にハントされ捨てられていった女たちが女権派に説得されても容易に大関打倒に立ちあがらないのも頷ける。あのセックスを一度見舞われれば骨抜きにされてぞっこん参ってしまい、捨てられてもなお彼への思慕を断ち切れないに違いない。いつかまたあの魂も蕩けるようなきつい抱擁をされる機会を心に描いて、訴えるどころか跨ぐらをせっせと洗って待っているのだろう。ちょうど今の綾の生活のようである。

大関英作が綾にとっての強烈な光だとすれば、山形欣治は彼女にとっての恐ろしい闇であった。何しろこの男は恐怖である。大関と似ているのは鍛えられた肉体と狂暴なオチ×××だけだ。彼の愛し方——それが愛といえればの話だが——はいわゆるサド・マゾとも違うような気がする。縄や手錠といった拘束具やバイブなんかの大人のオモチャ的小道具だったら大関もよく使うし、最近はその彼女の読む女性雑誌でもそれに関する特集が組まれたりして知識がないわけではなかったが、ヤマさんのはその

どれにも当てはまらぬ異常な変態なのだ。最初から最後まで、綾は罵倒され続けるのである。肉体的暴力もないわけではないが、後で調べると身体のどこにも傷はついていないくらいだから、さほどのハードさはないと思う。しかし精神的苦痛と来たら一週間くらい立直れないほどのダメージだ。『デブ、ブス、バカ』が綾につけられる形容詞のすべて。名前は呼ばれず、『島田あ！』と姓をがなりたてられる。何をしても気に入ってもらえず、叱咤と説教と詰問ばかりが繰り返され、綾ときたら彼の前に土下座して詫びてばかりいるのである。ヤマさんは現役の探偵だから、それが影響しているのかもしれないのだが、ただただ相手を侮辱し蔑み、苛め抜くのに性的昂奮を得るようなのだ。筋肉が殴られれば腫れあがるように、脳も鼓膜が破れるほど大声でなじり続けられるとカチカチに固くなって思考が出来なくなるのを、綾は初めて知った。脳震盪寸前の朦朧状態になったところで、ようやくヤマさんは彼女の肉体を貪りだすのである。

なぜ大関がこんな男に自分を赦すのか、綾が尋ねてみても生返事しか返ってこない。ただ綾が思うには、必ずと言っていいほどヤマさんに苛め抜かれた後には、それをケアするように大関部長が優しくしてくれるので、いつもより深い情感が胸に沸いてくる。光を目立たせるための闇……よくわからないのだが、そういう意図を薄々

感じてきた綾である。注射の後の褒美のアイスクリームには子供はいつもより多くの涎を垂らすものだ。綾ちゃんもヤマさんのシゴキに疲労した心と身体を大関部長の広くて厚い胸に抱かれる時の哀しみに似た感情に痺れるような快感を覚えだしてきたのである。生まれて初めてのマゾヒスティックな悦楽の芽生え……。綾の人生は変わったのだ。

この享乐的愛欲生活に浸り切った今となっては会社などはどうでもいいものとなっている。どうせ結婚相手を見つけるために腰掛け程度に考えていた職業にすぎない。製造業なんかの会社より出版社の方がよりトレンドィで格好よく見えたから選んだまで。だからさっさとやめてしまいたかったのだが、大関が赦さなかった。あんな事件を起こした後にはすぐやめられては上司としての沽券にかかわるといのが表向きの理由であるが、最近、大関はたびたび岡崎課長の動向を綾に尋ねだしているところを見ると、どうやらスパイとしての役割を期待しているのが本音のようなのである。まあいいさ、そのくらいはやってあげよう。利用価値があるうちは他の女のように捨てはしないだろうといった卑屈な料簡もあったし、岡崎課長への感情はすっかり憎しみへと洗脳されていたので良心の呵責もない。会社での彼女の一部分始終を大関に報告するのが日課となっていた。実は今日もそのためにこのマンションを訪れたのだが、待っていたのは鬼のヤ

マキンとは、不運であったわけである。

長い縄を引きずりながら綾がキッチンへ消えると、大関とヤマさんは煙草をふかしながらくつろぎはじめた。

「相変わらず小便チビらせているようだな」

と、大関はヤマさんにビールを注いでもらいながら言った。

「ま、こうでもしないと割りにあいませんからねえ」

ヤマさんは探偵代の現物支給という雇い主のセコさを皮肉るように笑って、自分のコップにも注ぐ。

「なかなかいい娘ですが、お里の知れたキャピキャピOLじゃ興味も長続きしないわけで」

どうやら賃上げ交渉に入ろうとしているようだ。

「フフ、そこが可愛らしいんじゃないの。トレンドを抱かなきゃ老けこむぞ」

「そうですかねえ——」

ヤマさんはそう答えながらいきなり手にしていた縄尻を力任せに引っ張った。絨毯の上を這っていた縄がピーンと緊張する。と、ここからでは見えないキッチンでドスンと何かが倒れる音が聴こえ、すぐ続いてガラスの割れる音が響いた。

「お尻は巨きいんだけど、おつむの方がちょっと……」

「わかったわかった、ヤマさんのインテリ女好きはもうわかってるよ。で、どうなの、あっちの一件は」

大関はあちこちに散乱していた綾の下着を拾って裏にし表にし、臭いを嗅いだりして酒の肴にしながら本題に移る。

「それなんですかね」

何がおかしいのか、ヤマさん、堪えきれないとでも言うようにクククと笑うと、きちんと畳んである——もちろん島田にやらせたのである——自分の背広からB5サイズの茶封筒を取り出した。

「これは高く買って戴けるとおもいますよ」

「ほう、現場を押さえたのか」

大関はそれを受け取り、中を覗いた。レポート用紙十数枚にわたる綿密な調査報告書、ビックサイズのスナップ写真、そして超小型マイクロカセットテープが三本である。

「へえ、盗聴もやったのかい！」

大関は目を丸くして中身を絨毯にぶちまける。

「相手が女精神科医ともなると意気ごみが違うんだよな。例の手を使ったんだろ」

「フフ、管理人のとつつあん、驚いてましたよ。あの女医が過激派の愛人だって言ったら。ま、偽造警察手帳のご威光はいつもの通り絶大でしたがね」

ヤマさんはアクの強い叩きあげの面相だから一般人などコロリと騙されてしまう。家宅捜索などと偽って不法侵入なんかお手のものだが、こういう不法行為は当然な

がらリスクも大きいのでここぞの時しかなやらない。今回はよほど獲物に興が乗ったのだろう。

さてその獲物だが、レポートは後回しにしてまず写真だ。

最初一枚は病院内の風景。どうやらヤマさん、外来患者になり済まし、目指す女医の診察室にもぐりこんだらしい。これは鞆に仕こんだ小型カメラの隠し撮りだろう。女医は横向きに映っている。デスクに身体を向けこちらに貌だけ曲げて問診中の姿勢。黒髪をひつつめにまとめあげて、縁なしの眼鏡をかけているので、まさに有能な医師の印象がする。どちらかといえば丸顔だろうがふっくらと女らしさを感じさせる美人である。もっと濃い化粧させて黒髪を大きく肩に垂らしたら銀座の高級クラブのママとしても通用しそうな雰囲気だ。薄いブルーに統一された半袖の上着——金ボタンが四つ、右サイドに縦に並んでいる——とスラックスをきちっと隙なく着こなしている。白衣というよりユニホームといった方がいい制服だ。その大きくたわんでいる胸、そこに留めてある名札には『田中』とあった。

「——田中朋子、年齢四十歳三ヵ月。王仁会齊藤精神科クリニック医師。バスト推定95以上……」

ヤマさんが自分の書いたレポートを拾いあげて読みあげた。

「ヤマさん、どんな症状だといってこの女医さんにか

かったの。色情狂？」

「躁鬱症のケがあると言ったんですがね。で、ヒップは——」

なるほど数字が間違いとは思えないプロポーションをしている。坐っていてもその豊満さは網膜が滲むくらいだ。きっとこのどこか中性的なユニホームの下には熟れて熟れて腐りかけ寸前の水蜜糖のような女体がムンムンしてるに違いない。

おおっと、次の写真をみた大関は唸った。ダンスレッスン場らしい一室に十数名の女たちが艶やかなレオタード姿でエアロビクスをしている写真である。朋子は最前列のちょうど真ん中で額に白のバンダナを巻いてとめ、黒のレオタードを着て踊っていた。素敵なお脚を1メートル間隔に広げて、貌を正面に向けたまま上体を90度前に倒し、しなやかな両手をパッと左右へ開き弾ませるように身体を揺らしている。生唾ものなのは当然彼女の胸。この体勢ではいくら身体にフィットしたレオタードといっても垂れ落ちる乳ぶさのふくらみが強調され、大きく開いた胸もとから挑発的な谷間が覗けている。黒のレオタードと対照的な乳白色の乳肌はまばゆいばかりの輝きを見せている。かなりの時間興じているらしく、貌も胸もとも、それから脂が良く乗った逞しいばかりの太腿もうっすらと汗に濡れていた。

「最近のインテリ女は身体も鍛えているんだねえ」

そう言えば同じ写真に映っている女たちも皆、聡明そうな貌をしていた。きっと高級志向の、客種を絞りこんだ経営方針でやっているスタジオなのだろう。

「週に二回、そこに通ってびっしょり汗を掻いています」

と、ヤマさんはビールを飲みほしながら言った。

「たまんない身体つきしやがって。熟女そのものじゃないの」

「大年増だからこそ、そうやって脂を絞っておかないとならんでしょう。ま、次を見てやっておくんない」

促されるようにもう一枚をめくると、

「な？ なんだ？ こいつは……」

大関の瞳が飛びださんばかりに見開かれた。一瞬、それは何かわからぬほどのピントのズレが生じていた。しかし写真の中央にはようやく人間の身体らしきものが写っているのがわかる。人間、それも女だ。頸から上がフレームアウトしているので物体にしか見えなかったがたしかに女が正座している写真である。女の身体には衣類の一枚も身につけられていないようだし、しかも両腕が背中にねじ曲がり、束ねられ、胸の方まで拘束されている緊縛体のように見えるのである。いや、たしかにこの女は縄がけされていた。大関は写真を横にしたり逆さまにしたり、顔を近づけたり遠ざけたりして吟味した後そ

う確信した。

「おいっ、こいつがまさか田中朋子？」

「実はそのまさかなんで——」

ヤマさんは思わず角刈りの頭を撫でながら相好を崩した。ヤマさんの話によると田中朋子のマンションの管理人をたやすくまるめこみ、彼女の寝室に忍びこんで盗聴器を仕掛けた時、一か八か熱センサーつき小型カメラも同時にセットしたのらしい。

「ベッドの上にフォーカスを合わせましてね。二十枚撮りでこの一枚だけ、なんとかそれらしきものが写ってたってわけで」

「田中朋子にはそっちの趣味があるってのか」

もうちょっとははっきり写っていれば恐喝のネタに使えるところだったが、しかしそれは贅沢なのだろう。この女が変態的性欲を保持しているという情報こそ、望外の収穫である。

「ほら、よく見ると女の前に白いものがボオーッとぼやけているでしょう。そいつはきっと男の下半身ですよ。正座した女の前で仁王立ちしている。つまりこの女医さんは構図からいっておしゃぶりの真っ最中としか思えないわけです」

うーん……と大関は唸った。

「つまり相手は岡崎晶の夫、沢口康彦か」

「ここ二週間、びったりこの女に張りついていました

けどね。つき合っている男は一人、そいつしかいませんよ」

ヤマさんはマイクロカセット用のレコーダーを取りだし、テープのひとつを装填して再生ボタンを押した。途端に流れてくる悩ましい女の喘ぎ。そして切れ切れにつながる言葉の意味に大関は耳を疑うのである。

『た、大佐殿、早くトドメをっ、トドメを——』

次に男の声が入った。

『極左弁護士めっ、とうとう本性を現わしやがったな。駄目だっ、もう一度、しゃぶりつけっ、お国のために汗を掻かんかい！』

あーんと甘ったるい鼻声を発し、猫がミルクを舐めるような淫猥な音がそれに続くのである。

大関はヤマさんと顔を見合わせてプツと吹きだした。

「なるほど芝居に入れこんで昂奮しているわけか」

他のテープもみんなこんな調子で、やれ軍事政権に囚われた女議員だの、やれインチキ新興宗教に拉致された女レポーターだの、そんなストーリー・プレイだらけなのだ、と、ヤマさんは目を細めて言うのである。

「意外だったね。狙った獲物が我々と同じ穴のむじなだったとは。しかし案外簡単に尻尾、捕まえたじゃないの。もう鍋に入れたようなもんだろ、この熟れ熟れ先生。後は引導を突きつけてやるだけだな」

憎き岡崎晶になんとか一泡吹かせられないかと彼女の

周辺をシラミ潰しに内偵をすすめてきたのだが、晶の夫が自分の会社の精神カウンセリングを受けていると知ってここを突破口にと狙ったヤマさんの勘はさすがに鋭かったわけだ。

以下は有料本編でお読みください。

#####